

ISSN 2189-3268

大学連携会議「学輪 IIDA」

機関誌 「学輪」

第9号 2021

飯 田 市

1 機関誌「学輪」(第9号) 発刊にあたって

飯田市長 佐藤 健 P. 3

2 学輪IIDAの取組

(1) 大学連携会議「学輪IIDA」全体会(公開セッション)

P. 5

大学連携会議「学輪IIDA」10周年記念セッション

知のネットワークへの挑戦～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～

学輪IIDA. NEXT10

【コーディネーター】

【登壇者】

法政大学 名誉教授 石 神 隆

東京農工大学農学研究院 教授 朝岡 幸彦

日本観光ホスピタリティ教育学会 会長 小畑 力人

法政大学国際文化学部 教授 高柳 俊男

立命館大学政策科学部 教授 平岡 和久

和歌山大学観光学部 教授 藤田 武弘

橋北地区地域協議会 会長 宮崎 栄治

飯田市上村公民館 主事 亀井 裕太郎

飯田HOIDE長姫高校 教諭 國松 秋穂

りんご並木まちづくりネットワーク

コーディネーター 桑原 利彦

交流と学びの会 宮嶋 聡子

(2) 「共通カリキュラム実行委員会

P. 17

「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」実践報告」

松本大学総合経営学部 専任講師 田開 寛太郎

3 論文

飯田市「通いの場(いきいき教室)」参加者における避難訓練参加への関連要因の検討

P. 25

国立研究開発法人 防災科学技術研究所 大塚 理加

日本福祉大学 常勤講師 宮國 康弘

4 報告

IIDAブランド推進事業における津田塾大学の取組

P. 31

—2020年度、コロナ禍でのIIDA発信を目指して—

津田塾大学 総合政策研究所 客員研究員 大島 幸

津田塾大学 総合政策学部 3年 吉田 瑛里香

3年 佐藤 陽菜子

2年 伊藤 由美子

5 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

P. 37



機関誌「学輪」(第9号) 発刊にあたって

飯田市長 佐藤 健



機関誌「学輪」第9号が、編集委員及び編集局を担っていただいた先生方、投稿していただいた皆様方など、学輪IIDAに関わる多くの皆様のご尽力のもと発刊できますことに、深く感謝申し上げます。

機関誌「学輪」は、平成27年に創刊号が発刊されて以後、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデル的な研究や取り組みを紹介することを通して、4年制大学を有しない当地における「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」に向けた取り組みとして発刊してきました。

学輪IIDAは設立から10年を経過し、当初19大学43名だった学輪IIDAのメンバーも73の大学・高等教育機関、研究機関に所属される139名の方にご参加いただき、大学間のみならず、大学と飯田の高校に加え、研究者との連携も進むなど大きな有機的ネットワークに成長してまいりました。

この2年の間は、日本のみならず、世界各国の経済や政治、社会、文化などあらゆる分野がコロナ禍による影響を受けています。飯田も同様に、経済活動のみならず、地域のイベントやお祭りなどのあらゆる活動が以前のように行えない状況であるものの、どうすればできるか知恵を出し合い、力を合わせて次世代に受け継いでいくことが大切であると考えます。

学輪IIDAのメンバーの皆様は、オンラインを活用した新しい形の学びや交流を模索しながら、プロジェクトや高大連携フィールドスタディなど、学びを止めない活動を当地域と一緒に取り組まれており、これは「コロナ禍を乗り越え『日常』を取り戻す」ことにつながるチャレンジとして期待するところです。

さらに令和4年5月には、平成30年7月の商業施設閉店以降空きビルとなっていた飯田駅前の建物が(仮称)飯田駅前プラザとしてリニューアルオープンし、2階、3階には公共フロアとして市公民館を中心に市民活動等を支援する関係部署が移転します。「ムトス」の精神に基づく市民活動の支援拠点として、若者を中心とした市民の皆さんはもちろんのこと、大学等の研究者、学生など市内外から集まる多様な方々の交流と共感による学びから様々な挑戦が生み出され、新たな価値が創発される場となるべく取り組んでまいります。

学輪IIDAに集う皆さまにおかれましても、当地域の持つ価値の発信とともに、当地域における新しい価値の創発につながる「リニア中央新幹線・三遠南信自動車道開通後の大交流時代を見据えた取り組み」に引き続きお力添えいただきますようお願いいたします。



令和2年度 大学連携会議「学輪IIDA」全体会 10周年記念セッション

令和3年1月23日(土)

ウェブ会議システム(Zoom)による開催

知のネットワークへの挑戦

～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～

学輪IIDA. NEXT10

○司会

これより学輪IIDA10周年記念セッションを開催いたします。テーマは「知のネットワークへの挑戦、新時代における持続可能な地域づくりを目指して学輪IIDA. NEXT10」でございます。

開催にあたり、コーディネーター及び5名のパネリストの皆様のご紹介をさせていただきます。まずコーディネーターの先生のご紹介をさせていただきます。

法政大学名誉教授の石神隆先生です。石神先生は1990年代半ばから飯田市と深く関わっていただいております。第4次飯田市基本構想の基礎調査以降、フィールドスタディの一環として大学生とともに当市を頻繁に訪問いただき、飯田下伊那地域を学びの舞台としながら数多くの魅力をご発見いただいております。学輪IIDAには発足時からご参加をいただいております。



(コーディネーター・パネリストの皆様)

続きまして、パネリストをご紹介します。

東京農工大学農学研究院の朝岡幸彦先生です。朝岡先生は、ご専門がSDGsの教育、社会教育、生涯学習、あるいは環境教育でございまして、最近はコロナ後の社会を見据え、未来のために地域や教育が何をなし得るかという点について模索をされております。自治体問題研究所の理事、それから日本社会教育学会の常任理事、日本環境教育学会の会長、その他の要職をお務めされております。当地域におきましては、遠山郷の振興に学生とともに取り組んでいただいております。

次に、日本観光ホスピタリティ教育学会会長の小畑力人先生です。小畑先生は、立命館大学の入試部長、総務部長などをご歴任され、2004年には和歌山大学の理事、観光学部の教授等をお務めされ、2018年より現職をお務めされております。専門は観光学でいらっしゃいます。学輪IIDAでは、飯田工業高等学校後利用プロジェクトのプロジェクトリーダー、飯田学輪大学のプロジェクトの座長としてご活躍をいただいております。それから南信州・飯田フィールドスタディにもご尽力いただいております。

続きまして、法政大学国際文化学部の高柳俊男先生です。先生のご専門は朝鮮半島の近現代史でございます。飯田下伊那で法政大学留学生対象の国内研修の実施が決まり、そのご担当に当たられたことから飯田市との関わりが始まっておられます。実際に現地を訪れ関係者と交流をされながら研究を進めておられ、当地域におきましては、ムトス飯田推進委員会のコーディネーター専門委員、あるいは第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定委員をお務めいただいております。

続きまして、立命館大学政策科学部の平岡和久先生です。平岡先生は財政学、地方財政論、地方自治体の経済、福祉、住民自治組織などがご専門でいらっしゃいます。自治体問題研究所の副理事長、日本地方自治学会の理事などをお務めされておられます。学輪IIDAの共通カリキュラム構築プロジェクト、それから共通カリキュラム実行委員会において中心的な役割を担われておられ、毎年、当地へ学生たちとともに調査研究でお越しいただいております。

最後のご紹介になります。和歌山大学観光学部の藤田武弘先生です。藤田先生は、同大学食農総合研究教育センターのセンター長でいらっしゃいます。ご専門は、農業経済学で、農山村再生、都市農村交流、グリーンツーリズム、6次産業化などを研究テーマとしておられます。観光庁の地域資源を活用した観光地域魅力創造委員会の委員、和歌山県のグリーンツーリズムの推進委員会の委員長、あるいは

は大阪府の農林水産審議会の専門委員、日本農業市場学会の副会長などをお務めされておられます。

今日は、以上の先生方にご議論をお願いしております。それでは石神先生から進行をよろしくお願いいたします。

○石神隆氏（法政大学）

皆様こんにちは。コーディネーター役の石神と申します。よろしくお願いいたします。

飯田には、長年にわたり数多くお邪魔しております。地域の社会や自然を知れば知るほど、ますます魅力を感じてしまうこの飯田地域です。学生とも一緒に何回も来させていただきましたが、若い人たちも肌身の感覚で深く地域の魅力を感じていたようです。

これは今日お集まりの先生方もまさに同じで、飯田に強く心を寄せる先生方や学生は数多く、その数は年を追うごとに増え、学輪IIDAが10年経った今では、何と60以上の大学や研究機関、百数十名にわたる様々な分野の研究者が、この飯田と深い関係を持つに至っています。

なぜ私たちは飯田に、こんなに魅力を感じるのでしょうか。飯田は古くから中馬による交通や水引に代表される特産品の交易、そして人形劇を初めとする様々な文化で、全国各地にネットワークを営々と築いてきた地域であります。

外からの知識、いわゆる「知」に敏感で、この地域独自に醸された深い知の蓄積と相まって、まさにこの飯田は、学びの伝統が深く生きついている不思議なところ。地域に根付いた歴史の研究や関心は日本の中でも群を抜く厚みを持っていますし、教育や自治の伝統もまた驚くべきものがたくさんある地域です。

近年はハイテク分野でも独特の発展を遂げており、また一方で農業、農的生活や自然も豊かに残っている、現在では本当に珍しい地域かと思えます。新しいものと伝統的なもの、外からの広い知と内にある深い知識、知恵が結び合い、そこから新しいものが創造されていく可能性を持つ、かけがえのない場とも言えます。

飯田の特徴を表す言葉に「結い」がありますけれども、英語で「ユニティ」ですね、飯田は結い・ユニティの場であり、それから飯田の合い言葉「ムトス」、新規創造の場でもあるわけです。この飯田の発する磁力は、個別に飯田との関係性を築いてきていた大学や研究機関の先生方が学際的なネットワークとしてお互いに結びつくことにより格段に大きくなりつつあります。

加えて、今後は特に、幅広い地域の方々と日常的に融合しお互いに学び合う中で新しいものをつくっていく、まさに新時代をリードする知的社会のモデルとなる可能性があります。多様で強力な飯田発の磁力線がますます生まれていくものと思っております。このような場の形成を目指し、構築されたのが学輪IIDAであります。環境文化都市を標榜する飯田市の強力な知のエンジンとして、市民と大学と

協働して、地域のため・日本のために一層の活動をしていければと願っております。

今日のセッションは、これまでの10年とこれからの10年、そして折り返し地点にある学輪IIDAを振り返り、将来の展望について先生方そして市民の皆様方と一緒に考えていければと思います。それではまず、5人の先生方から学輪IIDAにおける活動の紹介を兼ねて振り返っていただきたいと思います。飯田にどのような思いで来られたのか、また飯田はなぜご自身にとって大切なのか、これからの可能性も含め、飯田とのつながりの中で実感したことなどもお話しいただければと思います。

それではトップバッターとして、当地を留学生と一緒に隈なく歩かれてきた法政大学の高柳先生、よろしくお願いいたします。

○高柳俊男氏（法政大学国際文化学部）

どうぞよろしくお願いいたします。

私は法政大学国際文化学部の留学生研修の担当者になりまして、プレ研修を経て2012年度から7泊8日、あるいは8泊9日程度の必修研修の担当をしております。その趣旨は、日本は非常に狭いといっても多様性がありますので、留学生が日本を東京から見るだけでなく、東京以外の視点も入れて多面的に眺める必要があるということで始めました。

この取組は、他の大学と比べて5つほど特徴があります。それは、①留学生が対象であること。②この地域の国際化、あるいは異民族との関係を中心に研修していること。③留学生一人ひとりがその研修を踏まえて個人の発表を現地で行っていること。④大学の2単位の授業として事前学習を組み立て、それを履修した人が参加できる形にしていること。そして、⑤学部の資料室に飯田・下伊那文庫という文庫を用意して、現在書籍2,000冊ほど、映像が350点ほどあることなどです。

私の専門は決してこの地域ではなく、朝鮮半島の歴史や日本に住んでいる人の歴史・文化などですが、私は、まずは業務として受け身でやるのではなく自分が楽しみながらやろうと思っています。また、幸いこの地域には学びの要素も多いので、興味深い人といろいろ付き合いを持ちながら、楽しみながら学んでいます。

よく考えていることは、研修というどうしても現地に世話になってご迷惑をかけることも多いのですが、どうやったら現地に恩返しができるかということで、先ほどの学生の成果発表会や、私自身も学輪の機関誌、それから南信州新聞に時々寄稿させていただいています。

また、かつてこの地域に大学をつくろうとされた宮澤芳重の志を思い出そうということで、現地の人々と一緒に本をつくったり、あるいは伝記を復刻したりということをやりました。それからいくつか委員も受託しています。

最近では、残念ながら飯田ではなく伊那市の方でやっているのですが、伊那Valley映画祭のコーディネートなどをしております。これはこの地域に関わる、この地域をもっと広く見つめる3日間の映画祭で、昨年2回目をやりました。今年の秋に3回目をやる予定でいます。

ということで、とりあえず楽しみながらこの地域の皆さんと一緒にこの地を満喫している、そんな感じです。よろしくをお願いします。

○石神隆氏（法政大学）

高柳先生、ありがとうございます。

次に今日、後半に行われる、飯田学輪大学のプロジェクトの座長もされておられる小畑先生よろしくをお願いします。

○小畑力人氏（日本観光ホスピタリティ教育学会）

小畑でございます。15・16年前になりますが、和歌山大学に国立大学初の観光学部をつくることになり、この飯田は観光を1つのキーワードとするまちづくり・地域づくりをされているということで、早速、交流協定を結びにまいりました。その以来のご縁であります。

そして、新入生の勉強という形で飯田を訪問し、その後、飯田でフィールドスタディが始まり、そこに毎年学生とともに参加させていただいてきました。

飯田について思うことは、よく言われる言葉ですがそれでも、飯田は学びの宝庫であるということ。学生が学んでいきたいと思う素材がもう本当にたくさんあると思って来ております。

最近は大学も授業の仕方が随分変わりアクティブラーニングが注目されています。この飯田のフィールドスタディでも、そのアクティブラーニングを実践する場として関わらせていただいております。

飯田工業高校、今はエス・バードになっております旧飯田工業高校の後利用プロジェクト、あるいは本日3時頃から始まります飯田学輪大学を準備する座長も務めさせていただいております。

さて、学輪IIDAの10年ということにつきまして、先ほど言いました通り、飯田は学びの宝庫であると同時に、研究のつぼだろーと思います。社会科学、人文科学、自然科学、あらゆる分野の研究者や先生方が集まってくる。それだけ研究対象が多いということだと思います。ところが、先ほどの佐藤市長さんの話にもありましたが、飯田の人々のところで学ばせていただいているけれど、もうひとつその連携が弱いのではないかとということで、学輪IIDAの見える化・日常化を図るという話になってまいりました。

飯田には研究者、小・中・高等学校の先生、公民館やいろんな学習組織に関わって活躍されている皆さんなど内なる知がたくさんあります。この外の知と内の知を統合した学輪IIDAというようなものが、今課題となっていることを解決し、さらに発展させていく要ではないかと思います。

また、次代を担う生徒、学生さんが参加しておられる地域人教育が今後の飯田の発展を支えていくことになると思います。そうした取組としてフィールドスタディを続けて行く。そして一つ希望を申し上げますと、学輪IIDAの拠点を追手町あたりに求めたいなと思っております。

○石神隆氏（法政大学）

小畑先生、ありがとうございました。

それでは次は、立命館大学の平岡先生です。先生は学輪IIDAの共通カリキュラム構築プロジェクトのリーダーをされてこられました。

○平岡和久氏（立命館大学政策科学部）

立命館大学の平岡でございます。よろしくお願いします。

私が飯田下伊那に関わるようになったきっかけは、高知大学の教員をやっていた2002年頃の、平成の大合併なんです。当時は高知でも合併問題が起こっており、長野県が合併しない町村を応援するという自立プランを行っていました。自立プランづくりが全国に広がる中で、小規模町村としては非常に先駆的な取り組みを行っていたということで、泰阜村や阿智村などに入っておりました。

そして、平成の合併が落ち着いた2006年度、私は立命館大学政策科学部に移り、毎年自分の研究調査とともに、学生を連れて飯田下伊那にフィールド調査に入りました。そこで飯田市が主催しているフィールドスタディに参加することになり、他大学の先生や学生と交流して、これは素晴らしいと感じ、この飯田市にお世話になるようになったということです。まるで磁石に吸い寄せられるように、石神先生が言われるように、もう毎年、飯田下伊那に通うのが当たり前になっちゃったというところですよ。

そうこうしているうちに学輪IIDAが立ち上がるということになり、共通カリキュラム構築プロジェクトに参加しないかということで、いつの間にか巻き込まれて、まとめ役を務めるようになってしまいました。そういうことで、ある意味で喜んで巻き込まれて参加させていただいているというのが実情です。

共通カリキュラムについて少しだけ紹介します。小畑先生が言われたように、飯田はこれだけ多くの大学の学生・教員が来ている素晴らしい学びの宝庫です。そこで、学生は学びの宝庫の色々な側面を学ぶわけですが、ではそれで飯田がわかったことになるかというと、そうではありません。地域は総合的なものですから、総合的に理解することが必要です。そのために、総合的に理解するような体系的なカリキュラムをつくったかどうかということになったわけです。

そこから共通カリキュラム構築プロジェクトが始まりました。導入・展開・実践という大まかな体系をつくって、実践のところは既に地域と関わって一緒につくり上げる具体的な取組が行われていましたので、基礎となる導入科目

と、展開科目をモデルとしてやってみようじゃないかということで、2012年度から具体的なカリキュラムを始めました。そこで名城大学の福島先生から、まず基礎としてソーシャルキャピタルという視点で飯田の価値を捉えたらどうかとご提案いただき、シラバスをつくり、そして飯田市の担当の方や地元の方々と調整しながら始めました。今では導入科目であるソーシャルキャピタルを4回実施し、非常に完成度の高いプログラムとして充実してきました。展開科目もいくつか取り組み、大体の体系化ができてきました。

当時から地元の高校生も部分的に参加しておりましたが、高校生の学びである地域人教育を飯田OIDE長姫高校も進めておりましたので、これはもう高大連携による実行委員会を立ち上げて実践する段階に入ったらどうかということで、2018年に実行委員会を立ち上げて、本格的に高大連携をはじめました。

特に昨年度、2019年度は地元の高校生延べ79名が参加し、高校生と大学生がともに学ぶということが実現しました。今年度、これをさらに発展しようとしたところにコロナがやってきてこの導入・展開科目は完全オンライン実施となってしまいましたが、実践科目として取り組んだ遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディは、地元高校生が現地を訪れるハイブリッド型で実施されています。

コロナ禍でこれをどう進化させるか、それからいかに地域と大学・高校がお互いに学び合うという方向に持っていくかを今、課題としてしているところです。

○石神隆氏（法政大学）

平岡先生、ありがとうございます。

4番目は和歌山大学の藤田先生です。先生はグリーンツーリズムなど農山村の新しい観光政策の実践的な研究もされておられます。

○藤田武弘氏（和歌山大学観光学部）

ご紹介いただきました、和歌山大学の藤田です。

私と飯田市との出会いは、先ほど小畑先生からもご紹介ありました通り2007年に国立大学初の観光学部が和歌山大学に設置されまして、当時は珍しかった地域再生学科の教員として赴任したところが出発点になってございます。

学部創設当初は、学生と教員はとにかく夏になったらほぼ全員で飯田に出かけて、地域資源を活用した着地型観光の先進地から現場で学ぶというスタイルを確立していきました。

継続は力なりと申しますが、通っているうちに飯田の地域づくりの奥深さがじわじわと理解できるようになりまして、また市役所職員、あるいは地域住民の皆さん方の熱い思いから多くの刺激を受けることになります。ただこの時期は、まだ飯田の皆さんから学ぶばかりで域学連携とはおよそ名ばかりの一方通行的な関係でした。学輪の全体会に出席していても、どこか心苦しさが残っていた

というのが印象です。

そのような関係に変化があったのが2013年、ゼミ生と一緒に関わらせていただいた千代地区の全戸を対象とする調査研究でした。和歌山から学生たちと一緒に何度も千代地区に通い、話し合いを重ねているうちに地区の皆さんの顔がすぐに思い浮かぶようになりました。今、私のバーチャル背景になっているのは、よこね田んぼです。今も数名の方々とは和歌山にもお出かけいただけるようなつながりができていますが、この顔の見える研究・交流に関わったゼミ学生の多くが、今は地域づくりを現場で支える各地の自治体職員や大学、あるいは研究機関の研究者、そして農業の新たな担い手として活躍しています。そしてこの経験が、学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトへの関わりへとつながっていきます。

いくつかのプログラムを専門の立場から企画させていただきましたけれども、まさに飯田は学びの宝庫であるということの日々再確認する機会になっていました。学生たちはフィールドスタディへの参加をきっかけに多くの発見を持ち帰り、その評判が広がって参加大学も学生数も年々増加し、プログラムも年々充実してきました。しかし依然として共通カリキュラム構築のもう1つの目的である、地域と大学がともに学び合う場づくりが実現しているかと問われると、まだ確信が持てないままの状態が続いていました。

そこで大きな転機になったのが、2018年度から地元高校の先生方の協力を得て、大学生と高校生とが同じカリキュラムで飯田を学ぶという意味での高大連携の視点が加わったことでした。全国から集まるよそ者の大学生たちとともに地元飯田の価値を再発見する・気づく、という学びを経験した高校生に、故郷への愛着や誇りというお土産を持たせることができれば、例え進学や就職等で飯田を離れたとしても、その戻り方が変わるのではないか、いや変わってほしいという思いで現在も取り組んでいます。

飯田にとって関係人口となり得る大学生の創出はもちろんですが、地元の若者たちの故郷還流へとつながる学びを提供すること、これが、私たちが飯田で学ぶことの1つの意味でもあり、ようやくギブアンドテイクの関係を築ける場所に近づけたのではないかと考えています。

○石神隆氏（法政大学）

藤田先生、ありがとうございます。

最後になりましたが、東京農工大学の朝岡先生です。先生は、国連の提唱するSDGsや環境教育の専門家であります。飯田の将来とも深く関わる分野かと思います。

○朝岡幸彦氏（東京農工大学農学研究院）

東京農工大学の朝岡と申します。大学の名前からわかる通り私は農学部の教員ですが、実は社会教育と環境教育を専門とする教育学者です。

私がこの飯田に関わりを持たせていただいたきっかけは、

今からもう20年前になります。おそらく2000年頃こちらにお邪魔したことが出会いになるわけですが、私は社会教育の研究者ですので、飯田のことはずっと噂に聞いておりました。それは公民館活動が非常に盛んな社会教育のメッカであるということです。飯田だけではなく飯田・下伊那は全般的に日本全国で有名なところで、そのまちに入らせていただいたということです。

その後、しばらくお付き合いをしていく中で、学生を連れて来ると非常に教育効果があるということがわかりまして、最近をよく出入りさせていただいている遠山郷の皆さんに随分お世話になっています。実は遠山郷だけではなく、この後ご登壇されます桑原さんのご支援もあって、市街地の人形劇フェスタに学生を連れて行って随分いろんなことを教えていただきました。この中で、「叱られる」ことも含めて学生には本当に良い勉強になり、私も叱られた記憶があります。

それから学輪IIDAというのは非常に優れた組織だと思います。市民・行政と大学とがこのような非常に広範囲に、深くつながっている地域はまずありません。あとはこれらの条件をどれだけ地域づくりに生かすことができるのか。私どもも、まさに先ほど市長がおっしゃられた「見える化」・「日常化」が課題だと思っています。

そして、これは後半でお話したいと思いますが、やはり今、コロナや合併問題の中、市民主体の自治というものの意義が問われていると思います。そういう意味で、飯田は可能性を十分に持った地域ではないかと思っています。

○石神隆氏（法政大学）

朝岡先生、ありがとうございます。

皆様、ありがとうございます。非常に短い時間でしたが、これまでの学輪IIDAの活動を振り返っていただきました。今日はこの5人の先生方のご登壇でしたけれども、実はこの学輪IIDAに参加する非常に数多くの先生方が、飯田との関係でまさに一人一人、言わば百人百色の様々な活動がなされてきた10年であります。

活動は多様ですが基盤はみんな共通で、先ほどありましたように、飯田がまさに学びの宝庫であるということ。そして、この地域と大学の連携を支えてくださった市役所、また多くの市民の皆様方との出会い、ふれあい、この中に活動が深まっていったということでもあります。

学輪IIDAは、この市民の皆様との協働、学び合いをさらに深めて行くことを大きな目標・課題にしております。そこで、次は飯田の皆様からのお話をいろいろな方面からお聞かせいただきたいと思います。

○司会

それでは飯田会場からのパートに移らせていただきます。

学輪IIDAや大学連携との関わり、それからご自身の活動等を踏まえまして、飯田市民の皆様から振り返り、ある

いは学び・交流から得たもの、今後の可能性や期待することについてご発言をいただきます。まず、発言者のご紹介させていただきます。

飯田市の橋北地区地域協議会会長の宮崎栄治さんです。橋北地区では豊橋技術科学大学等が行うシャレットワークショップを4年間にわたりお受け入れいただきまして、当時のまちづくり委員会の会長を務められておりました。

次に、飯田市上村公民館主事の亀井裕太郎さんです。南アルプスの麓で民俗芸能が伝わる遠山郷と呼ばれる地域で、学校や地域が一体となった魅力づくり、教育などを立教大学のESD研究所と連携をして取り組んでおられます。

次に、飯田OIDE長姫高校の國松秋穂先生です。先生は、高校と地域、大学との連携による地域人教育や、企業との連携による地域活性化プロジェクト等に取り組んでおられます。

次に、桑原利彦さんです。りんご並木まちづくりネットワークのコーディネーターを務められており、りんご並木のまちづくりのネットワーク、あるいはいいだ人形劇フェスタなど、市民主体の様々な活動に幅広く携わられており、そうした活動を通じて、飯田を訪れる大学の研究者及び学生を受け入れていただいております。

次に、交流と学びの会の宮嶋聡子さんです。竜丘地区の学習交流活動に長年携われ、日本福祉大学のJICA途上国職員向け研修を20年以上にわたり受け入れられております。

それでは皆様よろしく願いいたします。



（発言者の皆様）

○宮崎栄治氏（橋北地区地域協議会）

ご紹介いただきました、宮崎と申します。よろしくお願いいたします。

私と学輪IIDAとの関わりは、豊橋技術科学大学が主体となり実施された、シャレットワークショップが、私どもの橋北地区で実施されたことに始まりました。平成24年の「旧飯田測候所及びその周辺エリアをデザインする」に始まり、4年間のお付き合いになりました。当時、橋北地区におきましても、重点的活性化事業としてこの件に取り組んでおりましたので、非常にタイムリーなワークショップになりました。

地域内を学生と一緒に歩き、真夏の暑い中での散策で皆汗びっしょりになったの取り組みでした。公民館の3階大会議室に寝泊まりしてのワークショップで、環境を心配い

たしましたが、風通しがよく涼しくて良かったと言われ安心をしました。また学生にはコンビニが近くにあったということも非常に好評でした。

2年目には、「地域資源を生かした回遊ネットワークと拠点をデザインする」に取り組まれ、地区内の回遊コースを提案してくれました。現在、整備が完了しました旧飯田測候所から二本松に抜ける歩道整備も学生からの提案でありました。その歩道及び仲ノ町の道路整備においては、歴史的なイメージの創出ということで石畳風の舗装の提案もあり、それらの意見は、現在整備が完了しました道路に生かされております。

またこの年、橋北地区内に設置を計画しておりました春草公園につきまして、学生にどんな公園がふさわしいかイメージを提案していただきたいということで要望しました。学生からの提案の1点目は、春草の代表作の落ち葉に描かれた樹種を植えたいかがか。2点目としては、朦朧体をイメージできる樹種の選定、ススキあるいは広葉樹と、それらの植え方について等々、面白い意見をたくさんいただきました。このアイデアは、設計の際に地元の要望意見として一部を提案し、現在完成した公園整備に生かされました。

平成26年からの2年間は「空き家・空き店舗を活用した市街地再生をデザインする」をテーマに、空き家の再生とその利用法についてご提案をいただきました。またこの問題は、まさに飯田市全体の重要課題で注目が集まりました。提案内容につきましては、高齢化の進む中で空き家を利用した老人大学の設営、あるいはその周辺に食事処の設置で賑わいができるのではないかとということで、この件については今後も重要な課題ですので、地域として検討事項に含めてまいりたいと思います。

学生は3泊4日の合宿だったために、成果発表の日には前夜から眠らずの取り組みとなり、当日は赤い目を腫らしながらグループ発表をしてくれました。発表終了後には、我々地区住民と学生と交流会を実施し、教授の先生にも加わっていただいて楽しく有意義な時間を持つことができました。

以上、学輪IIDAとの思い出をまとめ、発表とさせていただきます。ありがとうございました。

○亀井裕太郎氏（飯田市上村公民館）

皆さん、こんにちは。上村公民館の亀井と申します。今日はよろしくお願ひします。

私からは上村・南信濃地区で取り組んでいる自磨の時間、ESD塾の取り組みをご紹介させていただきます。この取り組みは、立教大学ESD研究所の皆さんと取り組んでいる活動になります。

まず事業の経過につきましては、元々、上村・南信濃地区には地元の小中学生対象の体験学習活動があり、これに

は地元の方が講師やサポート役になって取り組んでいました。そこに何かプラスアルファできないかと、それまでフィールドスタディで遠山郷に何度も足を運んでくださっていた東京農工大学の朝岡先生からのご提案もあり、2019年度から遠山郷ESD塾として活動しております。

この取り組みは学習支援と自然体験活動の2本の柱で取り組んでおりまして、学習支援では、宿題をする子どもたちに学生が寄り添って指導し、自然体験活動については、自然体験に生き物や植物の生態、自然環境などに関する先生方の専門的知見が組み込まれることで深い学びや経験につなげ、そこに学生と一緒に活動することで、絆が生まれて楽しい思い出となる活動をしています。

2年間の取組で、子どもたちがとても意欲的になったということが印象にあります。学生が帰った後、寂しくてお家で泣いてしまった子がいたり、毎年「大学生が来ないかな」という子どもたちの声が聞こえてきたりしています。その中で、子どもたちにとって大学生が関わることの意味が見えてきました。やっぱり子どもたちにとっては、大学生がお兄ちゃんとかお姉ちゃんみたいな、ちょっと身近な存在になってくれていて、3日間という短い期間の中でも距離がぐっと縮まっていたりします。

特に中学生については大学生の考えに触れることで、自分の少し将来、少し先の将来について考えたり、やりたいことをイメージしたりする経験にもなっていることが見てとれます。また自分の考えを発信する能力も養われているのが事実です。活動の中で書き出してみたり、その考えを伝え合ってみたり、また自分たちと違う環境で生まれ育った学生の生の声を感じるところも、大変貴重な経験になっていると思います。

また遠山郷として様々な課題を抱える中で、子どもたちと行うこうした体験学習は、地域の住民の皆さん、保護者の皆さんも含めて、みんなで明るい未来を切り開こうとしている活動として位置付けられています。そこにESDの視点から先生方や学生の皆さんの知見、経験、ネットワークなどのご協力をいただきながら、より良い活動にして取り組み続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

○國松秋穂氏（飯田OIDE長姫高校）

飯田OIDE長姫高校の國松から発表させていただきます。

私は、2016年の共通カリキュラムのフィールドスタディの調査対象として、本校の飯田OIDE長姫高校のフィールドスタディが調査対象となったことで、この学輪IIDAと関わることになりました。そして2018年度からは大学生の皆さんと一緒に、共通カリキュラムフィールドスタディに参加をするということで、今年で3年目となります。

高校生の育ちについては、当然この学輪IIDAの内容的充実はもちろんですが、地域の方の情熱や学校の枠を越え

た形で学ぶという緊張感の中、「知る」ということから「地域への誇り」への変化や、地元の方の活動を通しての豊かさについての価値観の変化、また、自分たちの進路や将来の夢なんかに変化を及ぼしています。

今年度共通カリキュラムフィールドスタディで遠山郷を訪れましたが、私はこれを特別化したプログラムではなくて、なんとか授業化できないかと考え、本年度、本校で取り組んでいる地域人教育と組み合わせることによって、私が担当した生徒たちの研究対象地区を遠山郷と定め、その地域調査の一環として遠山郷エコ・ジオフィールドスタディに参加をしました。そしてその後約10回程度、地域に入らせていただいて、フィールドスタディで出会った地域の方々と一緒に研究活動を実践させていただきました。

今月末に交流会を実施する予定でしたが、コロナ禍のためにあえなく中止となっておりますが、生徒たちは一緒に学んだこの方たちとなんとか何かできないかということで今、次の企画を考えているところです。

高校生の学びのほかに、今年、遠山郷に入らせていただいて感じることは、地域の方にとって、この学輪IIDAをきっかけに地域に関わろうとする地元高校生の存在が見えていってほしいと思います。先ほど和歌山大学の藤田先生からもお話がありましたが、今年度は関係人口という言葉について高校生たちも非常に真摯に向き合ひまして、彼らは、住んでいるところは遠山郷ではないんですけれども、初めて遠山郷のことを知るにつれ、地域内関係人口という言葉と出会っています。その地域内関係人口を構築して、卒業後も遠山郷と関わるということをこれからもやっていきたいと話しています。

また今は遠山郷に関わったり、または出身地区ではないところで活動をしたりしておりますが、高校生は鏡効果として、自分の住んでいる地域に対して新たな問いを見つけたいです。例えば、遠山郷で活動できたけれど同じことが自分の地域でできるのか、自分の地域には遠山郷で出会ったような格好良い大人がいるのか、といったことが見えてきています。

また私はこれが一番大事ななことかと思っていますが、高校生という世代は特に、世代を越えて一緒に学んだり遊んだりするという経験が非常に少ない世代かと思っています。飯田はそれができる地域ですし、この学輪IIDA、特に共通カリキュラムフィールドスタディではそういった学びができます。それを何とか通年化していきたいというのが今年度の取り組みであり、またそれができたと感じております。ありがとうございました。

○桑原利彦氏（りんご並木まちづくりネットワーク）

ここに登壇されている先生たちには本当にとってもお世話になっていて、最初に市長がおっしゃった「市民にどれだけ浸透しているか」という面で、僕はいろんな面で関わ

らせてもらっている、本当に数少ない市民だと思うんですね。

例えばムトスのコーディネート専門委員会では高柳先生にお世話になったり、人形劇では朝岡先生、小畑先生とはよく一緒に飲みに行っているいろんな市の話がされたり、それから平岡先生も本当にいろんな講座で呼んでもらったりして、今、自分自身にとって色々な刺激をもらったり、それから学ぶ場所になっているわけなんですけど、とにかく一言で言えばこの学輪IIDA、僕はもうとっても楽しいですね。これが市民にとって本当に良い形で生きていけば、とっても有意義なものになると感じています。

それから市民側にとっての意味を考えると、先生たちが研究に訪れたり、またフィールドスタディで学生が訪れたりする時に、実は話をする側にはやっぱり、非常に大きな責任が生まれているんですね。自分たちが何かをちゃんと担っているっていうことを改めて感じさせて貰える本当に素晴らしい機会になっていると思いますし、お互いに育っていく場所だということを感じています。

普通の研究室の中の研究では、きっと研究対象に影響を与えるということは間違っているという話になると思いますが、実際の現場では、学生さんや先生が入ってきてくれることでどれだけ市民の人たちに影響を与えてくれるかということを見ると、これはもうほかの地域とまったく違う、本当に特別な場所にしてもらっているという感覚があります。

これは、やっぱりもっと多くの人たちに知ってもらいたいなと思いますし、僕もいろんな物事に関わっているんですけど、その中で何か困ったことがあると、その専門の先生にすぐ電話して「これってどう？」とか、例えばその場所にきていろいろ話をしてもらいたいとか、そんなことをいつもお願いしたりもしています。

そういう意味では、この飯田下伊那という場所を皆さんの実験場所のような形でモデルとされていくとすれば、もう本当に嬉しいというか、ぜひもっとそれをやってもらいたい。

それから僕たちの役目としては、やっぱり刺激を受けたり学んだりしたことをどう地域に返していくかということもすごく問われていると思うんですね。そういうことをこれからも頑張っていきたいと思いますし、それからもっと多くの市民に知ってもらいたいということについてもこれから頑張っていきたいと思います。先生たちにもコロナが終息したらぜひ頻繁に来てもらって、飲み屋さんでそういう話を出してもらえれば嬉しいなと思っています。これからもよろしくお願いします。

○宮嶋聡子氏（交流と学びの会）

交流と学びの会の宮嶋聡子です。よろしくお願いいたします。

私が交流と学びの会と出会ったのは、今から20年ほど前になります。毎年8月になると日本福祉大学の大濱先生が、各国からの研修生と、それからゼミの学生さんを伴い飯田市に2週間ほど研修にお見えになります。

この地に学びがあるのか、何の研修にお見えになるんだろうかわかりませんでした。やがて先生の理論を知るきっかけを得て、公民館活動、上久堅の住民による活動、竜丘の古墳や大人の学校など住民自らの活動に目を向け、その実際をみることにより、名古屋で学んだ理論をより深く理解できるようになったと各国の方から伺いました。

大濱先生により、この地の活動が理論づけられたことを知ることにより、大きな発見をしました。そしてJICA草の根支援プロジェクトを通して、フィリピンのレガスピ市の水道事業のお手伝いをするようになりました。レガスピ市との交流を始めて、レガスピの方たちの生活に密着した学びは大きな実績を上げてきました。

私も4回ほどの現地訪問で、訪問する度に住民の方たちの一生懸命な活動に驚きを感じました。それとともに若い人たちが非常に多く、住民の中に入り込んで、ともに生活をする中での活動に感激とうらやましさを感じました。レガスピのある村の村長さんは「研修を受けてみて、原理原則を学べば、みんなの力で何でもできるようになる」と言っていたのに大きな力を感じました。

そして日本に帰り地元に戻り、今一度活動を改めて見直すとともに、フィリピンのように若い人たちとともに学んで、これらからの地域づくりに頑張っていきたいと感じました。

○司会

ご発言いただきました宮崎様、亀井様、國松様、桑原様、宮嶋様どうもありがとうございました。飯田からのレポートは以上で終わらせていただきます。

○石神隆氏（法政大学）

大変ありがとうございました。

お話をお伺いしてまして、飯田の象徴である結いという字、糸偏に吉と書くわけですが、つながる喜びと言いますか、つながれば何でもできるとつくづく思った次第でございます。まさにこの飯田は学びの宝庫で、本当に市民の皆様がお互いに先生になり、また生徒になって楽しく学び合っていくという、そういう新しい知の融合・創造のモデル地域ということを実感しました。

2030年頃に向けてのこれからの飯田の10年というのは、日本の中でも大きく注目される10年かと思います。ということで今、皆様からのお話を受けまして、次の10年でこの飯田を基盤とする学輪IIDAに何ができるか、どうすべきか、大いなる展望をこれから語り合っていきたいと思っています。

後半は、高柳先生、平岡先生、藤田先生、朝岡先生、小

畑先生、こういう順序でいきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○高柳俊男氏（法政大学国際文化学部）

先ほど小畑先生からも、外の知と内の知とのさらなる結合というお話がありました。

歴史学研究の観点から、この地域には人口10万人規模の都市としては珍しく歴史研究所があり、それから伊那谷研究団体協議会の構成メンバーとして、歴史や地名、あるいは理科系のものなど、様々な分野で研究している市民団体があります。

歴史研究所は、正確に言う तो ちょっと外と内の中間くらいに位置するような感じで、本当に内と言っているのかについてはいろいろ議論があるところかもしれませんが、いずれにしても学輪IIDAのこの10年では、こうした団体とあまり交流がなかったと思います。今回第2部で、歴史研究所の方がお話ししてくださるので良いと思うんですけども、やはりこれから高校生との交流に加えて、飯田の中にある研究団体との交流がもっと進むと良いと思っております。

例えば、この地域をフィールドに研究する学生や大学院生もいますので、『伊那谷研究入門』とか、あるいはこれまで大変多くの本が出ていますので、『伊那谷を知るブックガイド』のようなものを学輪IIDAと地元の人たちと一緒にやってつくるような共創・協働をすると、もっと関係が深まっていくと思います。その場合、飯田だけではなく、やはりもう少し広く下伊那全体とか、伊那谷全域とか、三遠南信とか、そういった視野も必要かと思っています。

近年は関係人口の創出ということが言われておりますし、この地域には大学がなくても学びの要素があるということで、一旦外に出た人が帰ってきて、ここでさらに学びを続けられるような「郷学・郷就」といった方面でこれからも進んでいけば良いし、私も協力していきたいと思っています。私が今、個人的にやっている作業としては、東京の信州飯田ふるさと大使を務めていたジャーナリストの長沼節夫さんが一昨年亡くなりましたが、彼が残した膨大な著作、特に私の専門の朝鮮関係のものが非常に多いんですけども、それを今、友人たちと遺稿集という形で編む作業をしております。

○石神隆氏（法政大学）

ありがとうございます。それでは平岡先生、よろしくお願いいたします。

○平岡和久氏（立命館大学政策科学部）

私は今後の展開を考えると、学輪IIDAがこの10年間蓄積してきたネットワークやソーシャルキャピタルを維持し、さらに蓄積し生かしていくことがベストかなと思っています。こういうものは、いわばふわっとしたもののようなのですが、共通カリキュラムのプロジェクトだけでも、こ

れまで相当いろいろな地域の方々に大変な協力をいただいています。桑原さんにも毎回お世話になっておりますし、それから牧野前市長の講義も何回となくお聞きました。

こうした中で教員間、あるいは地元の方々、あるいは市役所の方々と、どの間でも非常に厚い信頼関係が築かれてきました。それから何より重要なのは、やっぱり企画課の担当者、ここが肝です。地元の方々や大学教員と頻繁なコミュニケーションをとって信頼関係を築きながら、大学側から出されたたたき台を基に具体化して、地元の方々や高校とも相当コミュニケーションを密に取りながらカリキュラムの具体化を図ってきた、そういう要です。

こういうものは目に見えないんですが非常に重要で、こういうものを、例えばいろんな構想で新しく変えてしまうと、うっかり見えない財産が毀損することもあり得るわけですね。こういうことをしっかり認識した上で、新しい構想や改革を進めていくことがものすごく大事だと思います。

そういう意味で私は、共通カリキュラム実行委員会に参加してきておりますが、引き続きこれまでの蓄積の上で、自発性を基礎にしながら、緩やかで柔軟な高大連携を深めていくこと。そしてさらに新しい参加大学、新しい人たちにご参加いただけるような取り組みをしていくこと。さらに、オンラインを上手く組み込んでリアルとのハイブリッドも取り入れながら、國松先生が言われたような日常化をさらに深めていければと思っておりますし、それを通じた見える化や、地域と大学や高校との学び合いをどう進化させていくかということが次の10年のベースになると思っております。

○石神隆氏（法政大学）

平岡先生、ありがとうございます。引き続き、藤田先生、よろしくお願いします。

○藤田武弘氏（和歌山大学観光学部）

先ほど地域の皆さんのお話からも、学輪に関わった高校生が故郷に向かい合っていくことの大切さに触れられましたが、やはり端的に申し上げると、大学生の関係人口も高校生という還流人口も含めて、この飯田で人が育つというインキュベーター的な、ゆりかごとしての役割をしっかりと担っていくことが次なる10年において非常に重要な点だと思っています。

次年度からいよいよ千代地区出身、飯田高校OGの学生が私のゼミに所属することになりまして、コロナが終息し対面でのフィールドスタディが復活できるようになれば、ぜひ彼女と同期のゼミ生たちを連れて、共通カリキュラムフィールドスタディ、あるいは高大連携活動に大いに関わって行きたいと思っています。これがおそらく市民のみなさんへの学輪IIDA活動の見える化を図る上で、もっとも共感を得ることができる切り口の1つではないかと思えます。

そしてもう1つ重要なことは、地域資源の価値により一層磨きをかけるような活動も必要かと思います。例えば、今年度はコロナ禍の下で、ある種形容矛盾のようなオンライン・フィールドスタディを試行的に取り組みましたが、そこから得られた成果や経験を決して一過性のものにするのではなく、つまりは、終息後に安易に元の対面フィールドスタディに戻れば良いということではなく、対面とオンラインの双方の利点を生かしたハイブリッドなプログラムを提供するというで、飯田が持っているコンテンツに、これまで以上の輝きを持たせるということが必要ではないかと思います。

また食料・エネルギーなど生活に不可欠な物資を安易に海外に依存してきたことの脆さや、生活より仕事を優先して東京に一極集中してきた日本のバランスの歪みが、図らずもこのコロナ禍で顕在化してしまった。つまり日本社会の諸問題解決の受け皿として、今、自ずとそのソーシャルディスタンスが実現できると言われている地方での生活に関心が高まっているわけですが、それもやはり社会のイノベーションが必要ではないかと思います。

そういう点では、コロナ禍で停滞した社会を、気候変動を抑えて生態系を守りながら立て直す、いわゆるグリーンリカバリー的な視点を、飯田の地域づくりにももっと積極的に援用しつつ、これまでの学びから共有された飯田の価値を、例えば脱炭素化社会の実現、SDGsといったこのメッセージ性を込めた文脈から置き直してみということも、今後は必要になってくるのではないかと思います。

○石神隆氏（法政大学）

ありがとうございます。では、朝岡先生、よろしくお願いします。

○朝岡幸彦氏（東京農工大学農学研究院）

私が申し上げたいことは3点ございます。基本は、先ほど佐藤市長がおっしゃったように学輪IIDAの「見える化・日常化をどう実現するか」ということがやはり大きな鍵だと思います。そのための方策というか方向性として、先生方がおっしゃったことと合わせてお話しさせていただこうと思います。

今、画面に共有させていただいたのは追手町小学校の校舎の写真です。文化財ともなっているこの追手町小学校がまさに象徴するように、この飯田には「子どもから大人までの学びの総合力」がある。やはりそれを学輪IIDAと連携し、より強化することによって、もっと大きな力にする可能性があるのではないかと思います。

その鍵は、市民のみなさんの内発性とこの学輪IIDAの我々研究者、あるいは大学生の提言がいかにか結びつくかということだろうと思います。そういうことを前提にした時に、私は飯田に行っていくつも思うのですが、飯田の人たちは自分たちで言葉をつくる能力が非常にすごいと思うこと

があって、「学輪」自体が少しユニークな言葉です。この学輪IIDAもまさか飯田をローマ字にするとは思いませんでした。今回は、さらに飯田学●大学、りんごマーク●まで入れると、これはちょっと想定外ですね。

こういう柔軟性がやはり飯田の学びを背景にした強かさと言っても良いのですが大事なところで、こういうのをもっと伸ばしていくことによって、地域づくりとこの学輪IIDAが結びつくのではないかと考えています。我々は意外と、もっといろいろとお役に立てる局面があるのではないかと思います。

そして最後ですが、この追手町小学校の校舎が象徴すると申し上げましたのは、市街地の活性化とこの学輪IIDAの拠点づくりです。やはり10年経ちましたので、そろそろコア＝核をつくったほうが良いだろうと思います。これは組織面もそうでしょうし、新しいものをつくるという意味ではなく、公民館でも良いのですが、拠点を確保して市民の皆さんがいつでも学輪IIDAと接点を持てるような場をきちんと確保していくことが重要ではないかと思います。

○石神隆氏（法政大学）

朝岡先生、ありがとうございます。最後に小畑先生、お願いします。

○小畑力人氏（日本観光ホスピタリティ教育学会）

この学輪IIDAのこれからの10年をどうしていくかという話が様々な角度からあったかと思います。長期的な課題だとは思いますが、リニア時代を展望して、「この飯田の地に大学、大学院の設置を」という夢にアプローチしたいということを少し話させていただきたいと思います。

いくつかのことを申し上げたいと思います。まず、大学構想は、飯田・南信州の長年の悲願であります。やはり大学がないと、東京あるいは名古屋等に子どもたちが出て行ってしまいます。

次に、今、全国で公立大学の開設が相次いでおります。長野県でも私立大学の公立大学化がありました。新しい大学を、公立で創る事例もあります。公立の学校ができればそこに財政的な支援もあるという要件もございます。

そしてリニア時代を展望しますと、飯田には大学にしても大学院にしても、全国的なモデルとして創設できるという優位性があると思います。東京と飯田が45分という短時間で結ばれる。これはリアルな移動革命であります。人と人が45分という移動時間で直接交流できる。そして、コロナ禍の下でウェブによる教育研究が急進展、急発展しております。それが高度に結合する。これは科学技術第5期基本計画、Society5.0というものがございしますが、今日の日本社会が目指す方向であると言われております。

もう1つは、コロナ禍の直前の2019年11月に、文部科学省「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」が答申されました。ここに描かれているのは、これからの日本の

大学、あるいは専門職大学という新しい高等教育機関の将来像であります。飯田にはここに大きく合致する優位性があるということです。そして何よりも、これまで語られてきた学輪IIDAを初めとした知のネットワーク、学びの宝庫、研究のつぼ、そしてそれを支え交流してきた飯田の皆さんの行動力、地の力があるかと思います。これを生かしていけば、財政面へのメリットも大きいと思います。

先行モデルとしましては、公立の専門職大学として国際芸術観光専門職大学が、去年11月に認可をされこの4月に開設をされます。学長は演劇学で有名な平田オリザ先生であります。ここを調査・見学して参考にしながら検討を進めることも良いかということを最後に申し上げておきたいと思います。

○石神隆氏（法政大学）

小畑先生、ありがとうございました。

大変いろいろなご提案や課題、アイデアが出てきました。私の感想ですが、これまでの10年でかなりの石垣が築かれたのではないかと思います。これからの10年はこの石垣をより強くして、その上にみんなから見える、また日常的に寄れるお城を建てていくことが大事かと思った次第です。いよいよ飯田城の天守閣の構築というイメージでしょうか。出城と言いますか、キャンパスは各20地区なのかなと思った次第でございます。

ともかくリニア時代に、誰もがこの飯田城を目指すように、みんなで学びのまち、知の集積のまち、飯田の構築をしていければと思うわけでございます。今日はその折り返し地点、出発点になったと思います。

それでは、私から恐縮ですが、本日ご来賓としてお見えになっています、牧野前市長にごあいさつをお願いしたいと思います。牧野前市長は、学輪IIDAの、先ほどの私の言葉で言わせていただければ築城を目指して頑丈な石垣をつくられた方だと思います。牧野様、今日のご感想も含めてお話を賜れば幸いです。

○牧野光朗氏（前飯田市長）

皆さん、こんにちは。前飯田市長の牧野光朗でございます。

本日は、学輪IIDAの公開セッション、コロナ禍の大変厳しい中であるにもかかわらず、このように大学の先生方と市民の皆さん方が、一緒になって大変実のある議論が展開されましたこと、改めてそれぞれのコーディネーター、パネリストの皆さん、そして、このコロナ禍であるにもかかわらず、こうした全体セッションを企画、そして実行していただきました佐藤市長をはじめ市の職員の皆さん方、そして小池理事長を初め、信金の金庫の皆さん方、改めて感謝申し上げます。私の方からは3つほど感想と言いますか、思ったことを申し上げさせていただきます。

この10年をかけて学輪IIDAは、他に類を見ない大変大

きな輪を地域内外に広げてきたということを、改めてこのセッションで確認をさせていただいたところでございます。その基盤になっておりますのは、やはりこの10年間で構築されてきた大学の先生方、そして地域の皆さん方の厚い信頼関係だということを改めて確認させていただきました。

この公開セッションに合わせて、いつも機関誌が発行されます。今回、機関誌「学輪」は第7号、そして特別号として第8号がつくられておりますが、これはまさに大学側と、そして地域側の信頼関係に基づいた1つの成果の積み重ねと見て良いのではないかと思います。ほかの地域の方に驚かれるのは、この編集をされているのが、実は今日も大変素晴らしい議論をさせていただいた和歌山大学の藤田先生を初めとする先生方、そして企画課の職員の皆さんであるという、まさに域学連携あってこそ初めてできるものではないかと思います。こうした信頼関係の積み重ねを、これからもぜひ続けていっていただければということを改めて思ったところであります。

それから先ほど石神先生からも出ましたように、学輪IIDAの特徴の1つとして挙げられるのが、まさに多様性でございます。100人の先生がいれば、100人の地域のとの関わり方がある。私は、まさにこの多様性の保持こそが、学輪IIDAの1つの大きな要になっていると思うところがございます。

自由活発な議論ができ、そこから様々なプロジェクトが立ち上がっていく。そういった環境を、大学と地域の側がそれぞれ尽力する形でいかにこれからもしっかりと保ち発展させていくかということが、これからの学輪IIDAの輪のさらなる広がりにつながっていくと思います。

そうした延長線上にきつと、小畑先生からお話があったようなこの地域の悲願の達成というものも見えてくるのではないかと期待もさせていただいたところがございます。

そうして3つ目として、私がやはり申し上げたいのは、「楽しんで学ぶ」というこの地域のこの学び方ではないかと思っております。桑原さんからお話がありましたが、やはり学輪IIDAの学びというのは楽しんでこそだと思います。それがおそらく佐藤市長からも話があった見える化・日常化にもつながっていくと思うところであります。

学ぶ楽しみがあり、楽しんで学べる。この学輪IIDAのこうした基本的な部分というのは、不易流行という言葉に例えれば不易の部分ではないかと思う訳であります。改めてこの信頼関係と、この地域の学びを楽しむこと。そうした考え方によりまして、これからのウィズコロナ時代、アフターコロナ時代にも十分耐えられる学輪IIDAになっていただけるのではないかと期待をしているところであります。今日は、本当にありがとうございました。

○石神隆氏（法政大学）

牧野様、ありがとうございました。私たちも改めて飯田市民になったつもりで、飯田の誇りを胸に、また楽しみながら、学輪IIDAのさらなる高みを目指して市民のみなさんと一緒に頑張っていきたいと思っています。本日のセッションは、本当に大きな希望のスタートになったものと確信しています。ご登壇いただきました皆様、そして視聴されていらっしゃる皆様、さらに、裏方の皆様に手厚く御礼を申し上げます。大変ありがとうございました。

○司会

進行をいただきました石神先生、またご発言いただきました皆様、本当にありがとうございました。セッションの閉会に当たりまして、飯田市長の佐藤よりご挨拶申し上げます。



○佐藤市長

コーディネーターの石神先生、パネリストのみなさん、地域からご参加いただいたみなさん、そして牧野前市長さん、長時間にわたりありがとうございました。本日のセッションで様々なご発言があり、改めて学輪IIDAの10年の取組について確認をさせていただくとともに、これからの10年に向けて色々な夢が描けるようなセッションだったと思います。小畑先生からは、この地域の長年の悲願である大学設置についてリアルに考えたらどうかというご提案もいただきました。石神先生からは、つながれば何でもできるというお話もありました。本日いただいたものをしっかりと受け止め、またみなさんとともに考えていければと思います。本日は本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



共通カリキュラム実行委員会 「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」実践報告

松本大学 総合経営学部 観光ホスピタリティ学科 専任講師 田開寛太郎

1. はじめに

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ（以下、遠山郷EG-FS）では、「エコパーク、ジオパークを舞台に、聞き取り調査や体験活動を行い、地域資源の価値や活用方法について議論する」ことを目的に、事業を展開してきた。本稿では、これまでの実施状況、遠山郷EG-FSに対する参加学生・生徒の評価、地域にとっての成果について報告する。

2. 遠山郷EG-FSのカリキュラム構成

2.1 プログラムのねらい

長野県飯田市、大学連携会議「学輪IIDA」のボトムアップでボランティアな活動を通じた「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」はESD（Education for Sustainable Developmentの略、持続可能な開発のための教育）そのものであると認識している。2012年度から始まった、学輪IIDAにおける共通カリキュラムモデル事業は、地域・高校・大学の有機的連携や導入・展開・実践科目を通じた学びの体系化を目指してきた。遠山郷EG-FSは、2018年度から毎年度、共通カリキュラムの「実践科目」として実施している。

私立短期大学が1校のみ立地する飯田市では、高校を卒業した多くの若者が地域の外へと出て行ってしまう状況の中で、これまで大学・自治体間連携の役割と可能性が模索されてきた。学輪IIDAが設立した2011年1月時点で19大学（43名の研究者等が参画）であった構成大学数も、2021年10月時点では67大学（135名の研究者等が参画）になり、研究者や大学生とのつながりを広げている。朝岡・澤田（2017）の言葉を借りれば、「飯田市は大学が無いということをやうまく逆手にとって全国各地の大学の研究者とつながりを持つことに成功した」といえる。そして、学輪IIDAに大きな期待が寄せられているのは、大学・自治体間連携のなかで互いから学び合う場の創出であり、「一度外に出ても戻ってきたい飯田市」の魅力向上であると考えられる。遠山

郷EG-FSは、そのような大きなねらいに迫るための教育実践として、高大連携や域学連携による地域活性化の新たな可能性を導き出す、持続可能な社会づくり・人づくりに向けて重要な役割を果たすものである。

次に、遠山郷EG-FSの舞台となる飯田市上村・南信濃地区は、ユネスコエコパーク（正式には生物圏保存地域）や国内ジオパークに認定されたエリアが重なり、自然環境を保護し利活用できる大事な場所である。一方で、遠山郷にある遠山川は、「4年に一度は大水害」と言われるほど災害の多い川であり、遠山郷には「水魔」との闘いの歴史が刻まれてきた（後藤、1995）。こうした環境のなかで人々が災害を乗り越え、知恵を使ったり工夫を凝らして生活を営んできた大切な場所でもある。遠山郷に暮らす人々は、優しい自然から恩恵を受けるだけでなく、厳しい自然のなかで互いに助け合いながら生活を営み、災害とどのように向き合ってきたかの「災害史」を紡いでいる。このように豊かな自然環境や人の営みに学びながら、高校生と大学生の学習効果を高めようとするものが、遠山郷EG-FSのユニークな教育実践であるといえる。

また、遠山郷は魅力ある学校運営のひとつとして、学校選択制（小規模特認校制）を導入し学区外通学を認めるなど、学校を核とした地域づくりを進めている。こうした取組みに呼応するかのようになり、上村地区で発足した「遠山郷しぜんとあそぼうプロジェクト」では、遠山郷で体験できる魅力溢れるプログラムの開発が行われている。ほかにも、近年のUIターン者による観光に関する新規参入事業は顕著であり、両地区にゲストハウスが開業したり、地域の子どもの対象としたラフティングなどの体験教室が開始したり、チャレンジングな取組みは注目に値する。いまひとつの遠山郷EG-FSの特徴は、生きた教材として期待される多彩な出来事や事例を通して、参加者は時宜にかなった地域資源の活用を実装する方法を、実践的に学べることである。

こうした遠山郷の今日的状況を踏まえて、これまでに遠山郷EG-FSで設定してきた調査課題を見てみると、エコパークやジオパークと人の営みに関するテーマ設定が地域においては重要な意味を持つと思われる（表1）。豊かな自

表1 フィールドスタディ（2018-2021）のテーマ・情報提供者・参加者の概要

実施日	テーマ	情報提供者	参加者大学／高校【参加者数】
2018 年度 9/15-17	遠山の生業	前澤憲道さん（夢をつなごう遠山森林鉄道の会）	東京農工・院【1】、松本【1】、京都外国語【1】、飯田 OIDE 長姫【2】
	霜月まつり	松下規代志さん（木沢地区活性化推進協議会）、花崎孝夫さん、岩島勤司さん	東京農工・院【1】、松本【1】、京都外国語【1】、飯田 OIDE 長姫【1】
	秋葉街道	山崎律雄さん（遠山郷神様王国）	東京農工・院【1】、松本【1】、飯田 OIDE 長姫【2】、飯田女子【1】
	災害を辿る	吉村一さん（ジオパークガイド）	東京農工・院【1】、松本【1】、京都外国語【1】、飯田 OIDE 長姫【1】、飯田女子【1】
2019 年度 9/14-16	観光「あんばまいか！一人と人をつなぐツーリズム」	菅原慎一さん（遠山郷観光協会）、水戸幸恵さん（地域おこし協力隊）、遠山典宏さん（コンパスハウス）	東京農工・院【1】、松本【2】、飯田 OIDE 長姫【1】、飯田女子【2】
	和田「猟師体験から現状と課題を学ぶ」	益山勝人さん・木股玄登さん（地元猟師）	東京農工【1】、松本【2】、飯田女子【2】、飯田風越【1】
	下栗「下栗の営み」	野牧武さん（下栗里の会）	松本【2】、飯田 OIDE 長姫【1】、下伊那農業【1】、飯田女子【2】
	上町「遠山の水事情を知り、人々がどう共生してきたかを考える」	前島衛さん・山崎紀男さん（上町活性化委員会）	東京農工・院【1】、松本【2】、飯田 OIDE 長姫【1】、飯田女子【2】
2020 年度 9/14-16	災害と人の営み	前島衛さん・山崎紀男さん（上町活性化委員会）	松本【4】
	信仰と人の営み	針間道夫さん（遠山霜月祭保存会）、西森皇謙さん・伊藤誠智さん（木沢霜月祭野郎会）、花崎孝夫さん（和田諏訪神社氏子総代）	東京農工【1】、松本【1】、飯田 OIDE 長姫【3】、下伊那農業【2】
	地形・地質と人の営み「鳥になって見た下栗の大地と暮らし」	野牧民浩さん・古瀬知也さん（しぜんとあそぼうプロジェクト）	東京農工【1】、麻布・院【1】、松本【1】、飯田 OIDE 長姫【1】
	自然の恵みと人の営み「遠山であんばまいかー繋がりが生むマイクロツーリズム」	水戸幸恵さん（ゲストハウスの「太陽堂」）、遠山典宏さん（コンパスハウス）	東京農工【1】、松本【2】、飯田 OIDE 長姫【4】、下伊那農業【1】
2021 年度 9/18-20	若者・UI ターン者	伊藤誠智さん・西森皇謙さん（遠山郷探検隊）、水戸幸恵さん（ゲストハウスの「太陽堂」）	東京農工【2】、松本【1】、立教【1】、飯田【2】、飯田女子【2】
	自然・生態系	熊谷榮三郎さん（中郷在住）、前島 道広さん（程野在住）	帝京科学【1】東京農工・院【1】、飯田【1】、飯田女子【4】
	子育て環境	原葉月さん（中郷在住）、村山綾子さん（程野在住）、小池真沙美さん（上町在住）、柴原洋さん・柳瀬磨歩さん（遠山郷しぜんとあそぼうプロジェクト）	東京農工【1】、麻布【1】、松本【1】、下伊那農業【1】、飯田女子【4】
	災害と人の営み	吉村一さん・梶間八十五郎さん（南信濃在住）	麻生・院【1】、松本【2】、下伊那農業【1】、飯田女子【3】

然のなかで遠山郷の歴史、産業や文化を育み、そこに住む人々の暮らしを形成してきた居住エリアにおいては、遠山郷の持続可能性を軸にした地域づくりの視点が重視され、その上で課題となる「自然と産業」「サステナブルツーリズム」「災害と人の営み」等に関するテーマ設定の必然性が伴ってくるのではないだろうか。飯田市や遠山郷は、そのような地域課題を大学生や高校生に提供し、遠山郷 EG-FS を通じて一緒に課題に向き合うことで、参加者の新

鮮で自由な発想から新たな気づきを得ることができる。そして、人口減少社会を見据えた遠山郷の未来に関する提言を行うため、参加者と一緒に歩んでいくことができると考える。

2.2 カリキュラム構成

遠山郷 EG-FS の概要と学習到達目標は、「持続可能な社会を実現するためには、人々が暮らし・働く地域社会その



①知る

- ・事前学習
- ・基礎講座「遠山郷とエコパーク/ジオパーク」
- ・特別講座「いのちをくろう」
- ・インタープリテーション講座（導入・展開）



②わかる

- ・記録・観察
- ・聞き取り調査
- ・インタープリテーション講座（実践）



③伝える

- ・グループワーク
- ・地域成果発表会

図1 カリキュラムの概要

ものが持続可能でなければならない。急激な開発や過疎化によって衰退しつつある地域社会において、そのコミュニティとしての価値を再評価する方法について考える」こととし、2018年度に実施した第1回目のプログラムから一貫して変わらない。また、カリキュラムは大きく3つの要素で構成してきた（図1）。参加者には、①課題を「知る」ことから始まり、②さらに課題の背景を深く「わかる（理解する）」ことが求められ、③課題を解決するために人々に「伝える」ことを通して社会変革に向けた行動へとつながることが期待されている。このような大きな枠組みは、SDGs（Sustainable Development Goalsの略、持続可能な開発目標）を実現する教育（学習）の在り方であり、SDGs達成のエンジンとしてのESDの役割と可能性（阿部・朝岡、2019）から着想を得ている。

これら一連の流れを具体的に見てみると、①「知る」では、地質や地形を中心に調査研究を行っている専門家や、飯田市美術博物館の学芸員を介して遠山郷の様々な資源の価値にふれることができる。遠山郷に足しげく通い研究調査に携わる専門家や学芸員の話はリアリティに満ち、参加者は楽しく興味深く遠山郷の自然や文化を学ぶ。また、遠山郷EG-FSの名物授業ともいえる、地元猟師による特別講座「いのちをくろう」では、毎年多くの衝撃や感動を受ける。参加者は、「猟師」、「獣害」や「森林」等についての現状を知るだけでなく、講師の経験や価値観を通して参加者の共感的理解が導かれ、「豊かさとは何か」を深く考えさせられる。以上の遠山郷の生業、自然資源や文化的資源に関する講座は、インタープリテーション講座（導入・展開）と関連付けることで、それぞれの教育的効果を高めているといえる。講座の講師は、知識や経験に基づく解釈を加え

て参加者に伝えるといった、まさにインタープリテーションのお手本を示してくれる。そして、講師による親しみやすく分かりやすい解説は、遠山郷に出かける前（実際に調査を始める前）の動機づけにもなっている。

②「わかる」では、あえて前段の「知る」と区別している。参加者と地域資源（自然や文化、歴史）の間の意味づくりを通して、地域で起こっている問題を自らの問題として「腑に落とす」、そして遠山郷のために行動することができるようではないかと考える。そのような実感をともなった理解を促すために、参加者には、「＜あるく、みる、きく、かぐ、さわる＞など、歩き心地、着心地、居心地、目に映る光景、音、においなど、五感で感じたこともノートに書き写す」（橋本、2011）ことを求めている。単に目で見て聞いたことを知識として得るのではなく、すべての感覚を働かせた観察を通して、フィールドや人が何となく伝えようとしていることへの理解を深めることの重要性を強調している。また、インタープリテーション講座（実践）では、人（他者・自分、ねらい）・資源（フィールド、素材）・技術（伝え方、流れ）の3つの要素を踏まえて、「インタープリテーションの機会＝（人の理解＋資源の理解）×適切な技術＝ねらいの達成」といった独自の公式を学ぶ。この公式を調査のまとめに生かすことで、地域に対する理解がより深まるだけでなく、地域の新たな魅力に気づかされることもあると考える。

③「伝える」では、遠山郷EG-FSの大きな目的のひとつである「地域とともに学び合う場づくり」の実現を目指し、地域成果発表会を行っている。具体的には、調査報告書の作成・配布をもとに、グループによる10分程度の口頭発表（ポスターやスライド）を行い、地域側からの質疑応答やコ

メントを受け付ける。発表のなかにインタープリテーション講座で学んだ技術を取り入れることで、「伝える」から「伝える」ことへの手ごたえを感じている参加者も少なくないと思われる。また、2021年度には交流企画として、成果報告では十分に話せなかったことや、発表を行ってあらためて気づいたこと、感じたことなどを共有するための時間を別途設けた。地域側の参加者には、発表を聞いて、はじめて知ったことや気づいたことなどの感想の共有を求めただけでなく、卒業論文やプロジェクトへの参加・協力など、大学生や高校生との新たなつながりへと発展することを期待した。最後に、地域成果発表会では、遠山郷EG-FSの成果がひろく地域に還元されることを期待して、調査に協力頂いた方だけでなく、公民館主事を通じて様々な方に参加を呼びかけていることも特筆すべき点である。

2. 3 地域との連携

遠山郷EG-FSの計画立案においては、市役所と大学、高校による丁寧な議論や、事前学習や調査本番に向けた入念な準備が不可欠である。特に高大連携の教育効果を最大限高めるためにも、高校における「総合的な探求の時間」の開始をはじめ、地域との協働による学校教育改革を見据えて、遠山郷EG-FSに対する高校側のニーズに寄り添い進めていくことも重要である。学校教育のカリキュラムに位置付け、高校生を遠山郷に引率し合宿型のプログラムを実行するには、まだまだ工夫や改善の余地はあるものの、遠山郷EG-FSが確かな「生きる力」の育成に寄与することを期待している。なお、学輪IIDAにおける高大連携活動に関する高校側からの詳細な報告・評価については、國松(2021)を参照されたい。

参加者側の調整以上に重要なのは地元(遠山郷)との関係構築である。遠山郷における様々な資源(人的資源を含む)から学ぶといった取組みを進める際は、大学や高校から講義や聞き取り調査の依頼をすることが一般的であるが、遠山郷EG-FSでは、双方の学び合いの機会を意図的に生み出すための連携・協力の在り方をたえず考えてきた。2020年度は、地元へ派遣された地域おこし協力隊や若者団体メンバーが地域コーディネーターとなり、調査計画や成果発表会に向けた企画準備を一緒に行ったことは、大きな成果であったと実感している。

さらに、2021年度には、新たなキーパーソンとして飯田市美術博物館の学芸員が加わり、参加者を対象に学芸員との協働による事前学習がはじめて実現し、7月から9月にかけて3回実施できた。一つの成果として、学術的な視点で遠山郷にある地域資源を評価し、活用するための議論が深まっていると感じている。なお、「飯田市美術博物館2028ビジョン」の重点目標には市民や教育機関等との連携強化が掲げられ、飯田の博物館が遠山郷EG-FSとの接続を

通して、大学・高校・地域からの多様な学びに学術的に応え、リアリティに満ちた学びの機会を提供していることを特筆しておきたい。

何よりも地元との連絡調整の一翼を担う公民館主事の存在を忘れてはならない。地域形成に果たす公民館主事の力が発揮された例として、遠山郷の両地区(上村地区と南信濃地区)の偏りがないように、公民館主事は情報提供者の協力を等しく仰ぐことに細心の注意を払う。また、単に聞き取り調査の段取りをとるだけではなく、テーマ設定に対して参加者が有益かつ効率的に情報を得るための下準備も欠かさない。ほかにも、かつて参加者であった地元出身の高校生を情報提供者として意図的に依頼するといった心あたたまる配慮も見られた。そのような微に入り細を穿つ対応とともに、公民館主事の「力」ともいえる地域に対する姿勢や態度が、遠山郷EG-FSの独特の雰囲気を作り出し、学び合う場づくりに大いに貢献してきたといえる。

3. 遠山郷EG-FSの成果

3. 1 遠山郷EG-FSに対する参加学生・生徒の評価

遠山郷EG-FSの学びの大きな特徴は、遠山郷の自然環境そのものをつかって「教育」することにある。遠山郷EG-FSを通じて参加学生や生徒の成長にもたらされる教育上の効果の一端を、プログラムの事後に提出されるレポートやアンケートの感想(基本的には原文ママを掲載)に見ることができる。「自然について学ぶことから始まり、初めて会う人とのコミュニケーション、生き物によって生かされているという実感…すべてがこれからの人生の糧になると感じた」(大学生、2018年度レポート)、「下栗の里ビューポイントを下栗の方と回りました。きれいな景色だけでなく、その景色をまもるために力を尽くす地域の方々も素敵だなと感じました」(高校生、2019年度レポート)などと、自然や人とのふれあいが参加者に与えた影響は少なくない。そして、「インタビュー調査を通じ学ぶこともたくさんあった。…そのことならあの人が良く知っていると、そのことはあの人と一緒にやったとか、本当によく人の話が出てきた」(大学生、2019年度レポート)と、遠山郷にある地域資源は「人」とのつながりを抜きにして語ることはできないことを実感した参加者も多いと思われる。

次に、高大連携による遠山郷EG-FSが果たした教育的効果は、学校の枠を超えて、地域という教科書にはない「場」で学ぶことによって最大限発揮されたと考える。高校生の感想からは、「私たちとは全然違った感想や書き方で新しい発見があった…私もこんな人たちになっていきたい」(高校生、2019年度アンケート)、「大学生は高校生よりも深い問いを立てている…コミュニケーションや言葉づかいも長けていると感じた」(高校生、2019年度レポートから筆者が

要約)などと、大学生を素直な尊敬の眼差しで見る様子が窺える。また、大学生と高校生が一緒になって考えや思いを共有する場面がしばしば見られ、「大学生や先生方とさまざまな話をして一緒に笑いあうことができました」(高校生、2018年度レポート)、「大学生や高校生と意見を交わし合うのはとても幸せな時間でした」(高校生、2019年度レポート)と、互いに学ぶ意欲をはぐくむ雰囲気が漂っていたように思われる。

また、大学生の感想からは、「高校生たちにすごく、驚きました。…発表するときに堂々とした態度で…付け加えて話を膨らます、臨機応変に対応しているのに刺激を受けました」(大学生、2018年度レポート)、「高校生の積極的に参加しようとする意気込みに刺激をもらいながら、意見交換や情報共有できた…飯田市については高校生から沢山教えてもらい、多くの学びがあった」(大学生、2019年度アンケート)などと、高校生の参加態度や姿勢に刺激を受ける様子が窺え、自分の身の振り方を考えるきっかけになったといった感想も見られた。ほかにも、2020年度のオンライン開催においては、コミュニケーションの難しさを感じる一方、「大学生の知識や高校生の感性、様々な視点からの地域をシェアし、議論することで…たくさんの角度からの遠山郷を考えることができ、とても面白かった」(大学生、2020年度レポート)といった感想も見られ、何とか高大連携の意義を果たせたと考える。

3. 2 地域にとっての成果

本稿では、遠山郷EG-FSの主要テーマである「災害と人の営み」に注目して、これまでの成果物(調査報告書や発表会スライド資料)を手がかりに、地域にとってどのような成果があったかを評価する。

はじめに、遠山郷の自然が織りなす景観や地形は魅力的である一方、独特の急峻な地形や雨量の多さは同時に様々な災害をもたらす。遠山郷は、台風・洪水、地すべり、風害、そして地震と、これまで多くの災禍に見舞われてきた地域である。過去約1600年間の有史に記録された被害地震のうち、長野県南部に発生した被害地震は極めて少なく、広範囲に被害をもたらした地震は1718年の遠山地震のみであり(坂本、2014)、過去の歴史的な事実を知る手がかりを見つめる上でも遠山郷は重要なエリアであると考えられている。また、災害は繰り返されるものという前提に立ち返れば、災害の教訓を語り継ぐことに価値がある。その意味では、遠山郷EG-FSの取組みそのものが、歴史的災害の情報を集め、それを今後に生かしていくことにつながり、地域にとっての成果になる可能性があると考ええる。

表2は、「災害」をテーマに、これまでの参加者が作成した『調査報告書』から一部抜粋したものである。調査報告書には、情報提供者から聞いた内容をまとめるだけでな

く、参加者自身で文献を調べたり、実際に自分の目で見た確認された情報も含まれる。例えば、2018年度の調査報告書からは、埋没林の観察を通じて、現在と過去の自然災害の発生状況やその当時の被害をイメージしている。

2020年度と2021年度は、全面オンラインによる聞き取り調査のため様々な制約はあったものの、「実際の経験談から当時使用していたものや、詳しい被害の状況を聞いた…内容の濃いインタビューになったと感じている」(大学生、2020年度レポート)、「上町の横のつながりの強さがオンライン上でも伝わってくるお話しでした。…災害にあったときの悲惨さだけではなく、『〇〇をして工夫して生活した。』『〇〇をして復興した。』などその時できることを一生懸命行っていた様子をお話しくださった」(大学生、2020年度レポート)と、充実した調査の様子が窺える。また、地域側の参加者からも、「普段当たり前にあるものだから気づけないこと、身近にいる人に今さら聞けないことを知ることができた。そこから今でも大事なことや活かせること、これからできることを学生や生徒と一緒に考えていけると良い」といった感想を、公民館主事を通して共有している。

最後に、2021年度の地域成果発表会では、「災害時の経験談が次世代に詳しく伝えられていない状態にある。防災訓練も無線のやりとりが主に行われている。小中学生にも直接伝えられる機会が少なくなるなどの状況に不安を覚えている」といった状況と情報提供者の想いをうかがい知ることができた。なお、この情報提供者はジオパークガイドとして活動を行い、災害の過去の実態を正確に把握し、自身の経験や知識による解説を通して参加者に伝える努力を積み重ねてきた。筆者は、こうした世代間交流、地域間交流といった多面的で奥行きのある情報交流は重要であり、自然の恵みや脅威といった二面性に目を向け、学ぶことにこそ価値があると考ええる。また、そのような情報交流を通して、災害の被害を軽くするためのヒントや、防災の手段を考えるための取組みにもつながる可能性がある。地域と大学生や生徒が共に災害や防災について学ぶ機会の創出によって得られる成果は大きく、遠山郷EG-FSが果たす意義と地域への貢献は少なくない。

3. 3 全面オンライン開催の成果

新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)の世界的感染拡大は、被害者数、経済的・社会的インパクトなどの面から多大な影響を与えたことは言うまでもない。こうした一連の事態に対して、遠山郷EG-FSの取組みをどのように進めていくかが喫緊の課題であった。とりわけ、遠山郷に出向いて、人から話を聞いたり、行事に参加したりするなどの調査手法を通して、記録し観察することを前提とした研究や教育が困難な状況に直面した。

こうした困難を乗り越えるため、特筆すべき点は、繰り返しになるが、遠山郷の公民館主事や地域おこし協力隊が地域コーディネーターを担い、具体的な企画・実施に関わってくれたことである。地域側の協力者の存在は非常に頼もしく、そのおかげでオンラインを活用した聞き取り調査が実現し、大学生は自宅から、地域の方々と高校生は公民館からバーチャル空間につながる事ができた（図2）。地域のキーパーソンが参加者一人ひとりに語りかけるような、「事実上の」対面と変わらない状況の中で、インタラクティブに実感のこもったお話を伺うことができたと思われる。



図2 オンラインを活用した聞き取り調査(2020年度の様子)

表2 調査報告書（テーマ：災害と人の営み）の一部抜粋

埋没林	2018年度『調査報告書』
	西島橋付近の遠山川の河原では、現在と過去の土砂災害の傷跡を一望できる地点がある。手前にある横倒しの巨木は、1300年前に土砂で埋まったヒノキである。川の中には推定10mの幹が埋まっており、地震の影響の大きさがしのばれる。遠山川の東側の河原には流された巨木が置かれており、触ると年輪や河川に洗われた表層の様子がよくわかる。川の向かいにある山には、ここ数年の間に崖崩れを起こした場所の赤土があらわになっている。 今年2018年の台風で河原の形が変わってしまい、昨年まであった河原に下るための道がなくなってしまったのも印象的だった。
二八災害	2019年度『調査報告書』
	「二八災害」は昭和28年7月に遠山郷に集中した豪雨による災害である。上町への被害は甚大であり、被害額は当時の金額で約4億円にも上った。松島さんによると、戦後、大量に材木を使用したことにより、豪雨の影響で土砂崩れが起き、水流によって大量の土砂が流れたことが原因だと言う。 また、今後このような被害が起きないよう尾根や沢の木を残すことで、水の被害を抑えるようにしているとおっしゃっていた。
上村消防団	2020年度『調査報告書』
	火災のときに主に活動する上村消防団である。日頃の訓練の中では、川に木を流し、堤防を守る木流や、木を組み立てて作り、水流を変える中聖牛を使う訓練をしていたという。現在よりも、消防団に入ることは当たり前のことであり、入ったからには村のために活躍することが住民から期待されていた。使命感を持って活動していたことがお話を聞いていて感じた。二八災害当時、上村消防団員は90人出動し、団結して活躍したことが資料に残っている。 お話を聞いた山崎さん、前島さんも以前に団員であられて、団長を務めたことがあったという。上村で起きた災害時にいなくてはならない存在だったということが分かった。
災害時の住民の考え	2021年度『調査報告書』
	災害が何度も起こる中で住民の中には復興工事の費用で生活が成り立っている人たちがいた。そんな人たちは、冗談半分で「水害がもう一度起こってくれないか」と言っていた。 現在水害を経験した方が少なくなり、若い世代で水害の恐ろしさや経験を知っている人がいなくなっている。小中学生にも直接伝える機会がないことにこれからの課題を覚えている。

新型コロナに対応するために行ってきたことは「生みの苦しみ」であったと考えることもできる。この短期間に経験した様々な変革のきっかけを糧として、遠山郷EG-FSの新たな取り組みへと発展させることも可能であろう。特に、2021年度に始めたオンラインを活用した事前学習では、学芸員や公民館主事の協力のおかげで充実した内容となっただけでなく、参加できなかった学生や生徒のために、当日の様子をYouTubeからオンデマンド配信（限定公開）する飯田市職員の臨機応変な対応も特筆すべき点である。こうした対面・同期・非同期によるコンテンツを自由に選択し、学ぶことのできる「ハイフレックス」な学習機会のノウハウが、遠山郷EG-FSで蓄積され、フィールドスタディの参加者だけではなく、あらゆる人へと学びの機会が提供されることを大いに歓迎したい。

4. まとめ

遠山郷EG-FSを継続的に実施していくことで、「学生に地域のことを伝え、学生から問い返す」といった、学生・生徒・地域の双方にとって「学び」の経験が蓄積される可能性も見えてきた。例えば、大学教育においては、卒業研究調査のために再訪問したり、プライベートで遊びに行ったりと、地域とのつながりや関係性を続けようとする姿が実際に見られるようになった。また、高校教育においては、飯田HOIDE長姫高校の地域人教育による地域活性化プロジェクトの一つとして、ハロウィンに関連した祭りを企画・開催した例もある。今後、フィールドスタディの取り組みとは別に、このような大学・高校教育の実践活動とその成果を共有し、報告し合う（地域に還元する）機会を新たに持つことも一案である。

学輪IIDA共通カリキュラムが目指すべき重要な方向性は、「地域とともに学び合う場」を創造することであるが、「アグリイノベーションフィールドスタディ」実践報告（藤田、2021）の課題にあるように、依然として大学や高校側のみが学びを得るところに留まっていることが遠山郷EG-FSにおいても最重要課題としてある。そのため、地域にとってどのような成果が得られるかをあらためて検討すべき時期に来ていると考える。その打開策のひとつとして、遠山郷EG-FS分科会の新たなメンバーである学芸員と一緒に、専門的学術的な面から地域との協働の在り方を検討することが重要であり、そこに大きな可能性を感じている。

最後に、「コロナ禍、ウィズ／ポスト／アフター・コロナ」などといった言葉の呪文に翻弄されることなく、これまで培われてきた飯田の地域性や住民自治を土台として、飯田にしかできない、飯田だからこそできる「フィールドスタディ」の姿かたちを願ってやまない。

引用・参考文献

- 阿部治・朝岡幸彦（2019）、「SDGsが求める学び－知る・わかる・伝えることの意味－」、『知る・わかる・伝えるSDGs I 貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生』、阿部治・野田恵編、日本環境教育学会監修、学文社、1-4.
- 朝岡幸彦・澤田真一（2017）、「大学－自治体間連携の現状と可能性－学輪IIDAを事例として－」、『学輪』第3号、43-56.
- 藤田武弘（2021）、「学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会『アグリイノベーションフィールドスタディ』実践報告」、『学輪』第7号、21-27.
- 橋本和也（2011）、「一日フィールドワーク」、『フィールドワーカーズ・ハンドブック』、鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工編、日本文化人類学会監修、世界思想社、37-60.
- 後藤総一郎（1995）、『遠山物語－ムラ思想史』、ちくま学芸文庫、399pp.
- 國松秋穂（2021）、「学輪IIDA高大連携活動に関する高校からの報告」、『学輪』第7号、29-35.
- 坂本正夫（2014）、「遠山地震（1718年）の災害調査」、『伊那谷自然史論集』、15巻、1-18.



飯田市「通いの場（いきいき教室）」参加者における 避難訓練参加への関連要因の検討

A Study on Factors Related to Attendance at Community Evacuation Drills among Participants
of "Kayoino-Ba (Iki-iki Kyoushitsu)" in Iida City

国立研究開発法人 防災科学技術研究所 大塚 理加
日本福祉大学 宮國 康弘

Rika Ohtsuka
National Research Institute for Earth Science and Disaster Resilience
Yasuhiro Miyaguni
Nihon Fukushi University

【論文要旨】

本研究では、飯田市の「通いの場」であるいきいき教室に通う高齢者1094名に対して、避難訓練参加の特徴を明らかにし、今後の防災対策を行う際の示唆を得ることを目的とし、質問紙調査を行った。分析対象は874名（有効回答率79.9%）であった。対象者の属性と避難訓練参加の χ^2 検定では、性別では男性が87.5%と女性64.6%より高く、年齢では85歳以上52.1%が85歳未満72.7%より低かった（ともに $p<.001$ ）。また、ロジスティック回帰分析で個人属性を統制し、要介護リスクを検討した結果、口腔機能低下者は、低下がない者と比べて約34%避難訓練参加が少なく、手段的日常生活動作の自立者は非自立者と比べて約60%多いことが認められた。本研究の結果から、やや虚弱となってきた高齢者は、避難訓練に参加しない可能性があること、女性高齢者の避難訓練参加を促進の働きかけが重要であることが示唆された。

キーワード：地域高齢者、防災対策、社会参加、通いの場、健康づくり

Key Words：Community-Dwelling Order Adults, Disaster Prevention, Social Participation, Kayoino-Ba, Health Promotion

1. はじめに

飯田市は、歴史的に風水害が多い地域であり、甚大な被害が生じている。そのなかでも、昭和36年6月の通称「36災害」は、日本の災害史に残る大災害であり、136名の死者となった¹⁾。飯田市でも、死者・行方不明者16名、流出家屋62戸、全半壊家屋105戸、床上・床下浸水72戸の大きな被害が生じた²⁾。その後も、昭和58年台風10号災害、平成18年7月豪雨災害といった災害に見舞われている。これらは、天竜川上流域は、地質構造がもろいこと、険しい地形であること、山岳部で降水量が多いこと等から、土砂災害が発生しやすい環境下であることが原因として挙げられている。このような歴史的な経緯もあり、治水事業等のハードでの防災対策は進められてきた。しかし、地球温暖化等の影響もあり、自然災害はますます激甚化しており、地域での防災力を高めることも必要である。飯田市は、家庭や自主防災組織を軸に災害に負けないまちづくりを目指しており、地区ごとのハザードマップの公表や、地区単位での防災対策等、自助、共助を促進する防災対策にも力を入れている²⁾。

飯田市における高齢化率は、32.4%（令和2年10月時点）

と、全国平均より、3.8ポイント、県平均と比べても0.5ポイント高く³⁾、要介護認定者の出現率も高い状況が続いている。そのため、飯田市は高齢者の健康寿命の延伸に向けて、積極的な取り組みを行ってきた。そのひとつとして、飯田市では、介護予防・日常生活支援総合事業の一般介護予防事業としての「通いの場」であるいきいき教室を実施している。このような「通いの場」の事業は、高齢者の社会参加の機会を提供することによる介護予防への効果が示されており、全国で展開されている。

飯田市におけるいきいき教室は、各地区集会所、公民館等の市内92ヶ所（令和2年4月現在）で、月1～2回実施されている。参加条件に「会場まで徒歩で参加できる」があることから、自立（介護認定を受けていない）高齢者と、歩行機能の大きな低下のない要支援認定高齢者が対象となっている。内容は、転倒予防のための運動、ゲーム、レクリエーション、歌唱、工作等であり、健康相談や認知症予防の講話も行われている。いきいき教室の参加者は、自立高齢者の中でも、以前ほどは社会参加ができなくなってきた高齢者の参加が想定されているため、やや心身機能が低下している高齢者と考えられる。本研究の調査時（令和2年4月現在）において、参加者は1094名であった。

厚生労働省では、令和2年度から、地域医療介護総合確保基金（介護分）において、介護予防拠点事業（通いの場等）における健康づくりと防災の意識啓発の取組支援を始めた⁴⁾。これまで、健康づくりの場として考えられていた「通いの場」であるが⁵⁾、⁶⁾、⁷⁾など、防災の意識啓発に取り組む場としての役割が、新たに追加されたのである。飯田市の「通いの場」であるいきいき教室も、高齢者の防災意識向上に向けた取組を行う拠点のひとつとなる可能性があると考えられる。

災害時の生存避難については、先行研究から避難訓練が有効であることが示されている。戸川ら（2017）は、避難訓練参加者は、実際の避難において、実際に避難行動をとる傾向があり、短時間で避難できたことを報告している⁸⁾。このことから、自立高齢者の生存避難においても、避難訓練は有効であると考えられる。そして、避難訓練参加を促進していくことが、平時からの災害対策として求められる。しかしながら、これまで高齢者の避難訓練参加に関連する要因は示されていない。

飯田市では、前述したように防災対策に力を入れており、飯田市全体の避難訓練も年に1度実施されている。そのため、他の多くの自治体より、市民の避難訓練参加の機会は多いと考えられる。飯田市の高齢者における避難訓練参加に関連する要因を示すためには、飯田市の高齢者での調査が必要となる。

そこで、本研究では、飯田市の「通いの場」であるいきいき教室に通う高齢者に対して、避難訓練参加に関連する生活状況や心身機能等の要因を検証し、「通いの場」参加者における避難訓練参加の特徴を明らかにするとともに、今後の飯田市における防災対策、特に高齢者への対策を促進するための示唆を得ることを目的とした。

2. 調査概要

2. 1 調査方法

調査対象者は、飯田市の「いきいき教室」に通う高齢者1094名であった。調査時期は、令和2年4～6月であった。調査方法は、「いきいき教室」参加者登録時に調査票を配布し、自記にて回答後、その場で回収した。調査時に回答の学術研究の目的での利用に同意を得られた874名（有効回答率79.9%）を分析対象とした。なお、本調査は、国立長寿医療研究センター（受付番号1274）の倫理審査を受けている。

2. 2 調査項目

2. 2. 1 対象者の属性

性別、年齢、要支援認定、労働収入、学歴、世帯状況（独居の有無）の有無について尋ねた。

2. 2. 2 主観的健康感

主観的健康感は、「あなたの現在の健康状態は、いかがですか」という問いに、「よい」「まあよい」「あまりよくない」「よくない」の4件法で回答を求めた。「よい」の回答者を高群、「まあよい」「あまりよくない」「よくない」の回答者を低群とした注¹⁾。

2. 2. 3 要介護リスク

①栄養

身長と体重を尋ね、BMIを算出した。BMIが18.5未満、かつ「6か月間で2～3kg以上の体重減少がありましたか」の問いに「はい」と回答した場合は、低栄養ありとした⁹⁾。

②口腔機能

「半年前に比べて固いものが食べにくくなりましたか」「お茶や汁物等でむせることがありますか」「口の渇きが気になりますか」について、2項目以上が該当する場合は、口腔機能低下ありとした⁹⁾。

③運動機能

「階段を手すりや壁を伝わずに上っていますか（逆転項目）」「椅子に座った状態から、何もつかまらずに立ち上がっていますか（逆転項目）」「15分くらい続けて歩いていますか（逆転項目）」「この1年間に転んだことがありますか」「転倒に対する不安は大きいですか」を尋ね、3項目以上に該当した場合は運動機能低下ありとした⁹⁾。

④閉じこもり

「週に1回以上外出していますか」に該当しない場合は、閉じこもりありとした⁹⁾。

⑤認知機能

「周りの人から『いつも同じことを聞く』など物忘れがあると言われますか」「自分で電話番号を調べて、電話をかけることをしていますか（逆転項目）」「今日は、何月何日かわからないときがありますか」について、1項目以上該当する場合は認知機能低下ありとした⁹⁾。

⑥うつ傾向

ここ2週間で「毎日の生活に充実感がない」「これまで楽しんでやれたことが楽しめなくなった」「これまでできていたことが今では億劫に感じられる」「自分が役に立つ人間だと思えない」「わけもなく疲れたような感じがする」について、2項目以上に該当した場合は、うつ傾向ありとした⁹⁾。

⑦手段的日常生活動作

「バスや電車、車を使ってひとりで外出していますか」「自分で食品・日用品の買い物をしていますか」「自分で預貯金のお出し入れをしていますか」「友人の家を訪ねていますか」「家族や友人の相談にのっていますか」について、該当する場合に1点として合計得点を算出した注²⁾。

2. 2. 4 避難訓練参加

「過去3年間に地域の避難訓練など、災害や緊急時の訓練の行事に1回以上参加しましたか」について、「参加した」「地域に訓練の行事があるが参加していない」「地域に訓練の行事がない」での回答を求めた。

2. 3 分析方法

避難訓練参加については、設問に対し「参加した」と回答した場合に参加あり、それ以外の項目への回答を参加なしとした。分析は、以下のとおり行った。まず、避難訓練参加と非参加者の特徴を記述分析によって示した。次に、性別、年齢、要支援認定、世帯状況（独居の有無）、学歴、労働収入、主観的健康感を独立変数、避難訓練参加の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行い、避難訓練参加と参加者の属性との関連を検討した。性別、年齢、要支援認定、世帯状況（独居の有無）、学歴、労働収入、主観的健康感を統制変数とし、要介護リスクの各項目を独立変数、避難訓練参加の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。その際、各独立変数の相関から、多重共線性を生じる可能性がないことを確認した。

分析には、IBM SPSS Statistics 27を用いた。

3. 結果

3. 1 避難訓練参加と非参加者の特徴（記述分析）

いきいき教室参加者における避難訓練参加の有無と属性、主観的健康感、要介護リスク（生活機能、身体機能等）との関連について、 χ^2 検定で検討した。（表1）。

表1 避難訓練参加と非参加者の特徴

		避難訓練参加		n	χ^2	p
		なし	あり			
性別	男性	7	12.5%	49	87.5%	0.001
	女性	289	35.4%	528	64.6%	
年齢	85歳未満	159	27.3%	424	72.7%	0.001
	85歳以上	140	47.9%	152	52.1%	
要支援認定	なし	256	33.1%	517	66.9%	0.165
	あり	45	40.2%	67	59.8%	
労働収入	なし	261	35.1%	482	64.9%	0.119
	あり	39	28.1%	100	71.9%	
学歴	9年以下	161	39.2%	250	60.8%	0.003
	10年以上	138	29.5%	330	70.5%	
世帯状況	独居以外	237	35.7%	426	64.3%	0.060
	独居	64	28.8%	158	71.2%	
主観的健康感	低群	225	36.9%	385	63.1%	0.006
	高群	75	27.4%	199	72.6%	
低栄養	なし	274	33.3%	549	66.7%	0.094
	あり	6	60.0%	4	40.0%	
口腔機能	低下なし	200	30.8%	450	69.2%	0.001
	低下あり	81	44.3%	102	55.7%	
運動機能	低下なし	142	28.7%	353	71.3%	0.001
	低下あり	152	41.0%	219	59.0%	
閉じこもり	なし	48	50.5%	47	49.5%	0.001
	あり	251	31.9%	535	68.1%	
認知機能	低下なし	153	32.5%	318	67.5%	0.353
	低下あり	145	35.6%	262	64.4%	
うつ傾向	なし	169	30.7%	382	69.3%	0.009
	あり	123	39.7%	187	60.3%	
手段的日常生活動作	4点以下	203	40.9%	293	59.1%	0.001
	5点	95	25.3%	281	74.7%	

注：低栄養は5未満のセルがあるため、Fisherの直接法を行った。

対象者の属性では、性別では男性が高く（避難訓練参加者 男性87.5%、女性64.6%； $p<.001$ ）、年齢では85歳以上が低く（同 85歳未満72.7%、85歳以上52.1%； $p<.001$ ）、学歴では10年以上が高かった（同 9年以下60.8%、10年以上70.5%； $p<.005$ ）。要支援認定の有無、労働収入の有無、では、有意な差は認められなかった。世帯状況（独居の有無）では、独居は71.2%と、独居以外64.3%と比べて、参加割合が高い傾向がみられた（ $p=.060$ ）。

主観的健康感と避難訓練参加の関連では、主観的健康感高群で避難訓練参加者の割合が高かった（同 低群63.1%、高群72.6%； $p<.01$ ）。

要介護リスク（低栄養、口腔機能、運動機能、閉じこもり、認知機能、うつ傾向、手段的日常生活動作）と避難訓練参加との関連では、口腔機能、運動機能の低下、閉じこもり、うつ傾向があると、避難訓練参加者の割合が低かった（口腔機能低下なし69.2%、口腔機能低下あり55.7%； $p<.001$ 、運動機能低下なし71.3%、運動機能低下あり59.0%； $p<.001$ 、閉じこもりなし49.5%、閉じこもりあり68.1%； $p<.001$ 、うつ傾向なし69.3%、うつ傾向あり60.3%； $p<.01$ ）。また、手段的日常生活動作が満点（5点）だと避難訓練参加の割合が高かった（4点以下59.1%、5点74.7%； $p<.001$ ）。低栄養がある場合の避難訓練参加者の割合は40.0%と、低栄養がない場合（66.7%）と比べて、低い傾向が認められた（ $p=.094$ ）。また、認知機能と避難訓練参加との関連は認められなかった。

3. 2 避難訓練参加と要介護リスクとの関連

いきいき教室参加者の属性と避難訓練参加との関連を検討した。性別、年齢、要支援認定、労働収入、学歴、独居、主観的健康感を独立変数、避難訓練参加を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った（表2）。その結果、避難訓練の参加は、女性では男性と比べて約70%少なく（OR:0.297, 95%CI:0.131-0.675）、85歳以上でも85歳未満と比べて約60%少ないこと（OR:0.408, 95%CI:0.297-0.561）が認められた。また、学歴が10年以上では9年以下と比べて約37%多く（OR:1.365, 95%CI:1.014-1.837）、独居はそうでない世帯と比べて約53%多く（OR:1.528, 95%CI:1.071-2.178）、主観的健康感高群は低群と比べて約57%多く（OR:1.469, 95%CI:1.057-2.042）、避難訓練への参加が認められた。

表2 避難訓練参加と個人属性および主観的健康感との関連 ロジスティック回帰分析

	β	オッズ比	95% 信頼区間
性別 (Ref:男性)	- 1.214	.297 **	.131 - .675
年齢 (Ref:85歳未満)	- .897	.408 ***	.297 - .561
要支援認定 (Ref:なし)	.029	1.030	.660 - 1.608
労働収入 (Ref:なし)	.020	1.021	.664 - 1.568
学歴 (Ref:9年以下)	.311	1.365 *	1.014 - 1.837
世帯状況 (Ref:独居以外)	.424	1.528 *	1.071 - 2.178
主観的健康感 (Ref:低群)	.385	1.469 *	1.057 - 2.042
定数	1.761	5.821 ***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
 モデル $\chi^2 = 65.754$, $df = 7$, $p < .001$
 HosmerとLemeshowの検定 $p = .733$, 正判別率 67.8%
 N=886

次に、要介護リスクと避難訓練参加の関連を検討した(表3)。参加者の属性と主観的健康感を統制し、要介護リスクとして、低栄養、口腔機能、運動機能、閉じこもり、認知機能、うつ傾向、手段的日常生活動作を独立変数、避難訓練参加を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果、避難訓練参加は、口腔機能の低下はない場合と比べて、口腔機能低下者は、約34%避難訓練参加が少なく(OR:0.661, 95%CI:0.447-0.977)、手段的日常生活動作が自立していない場合と比べて、自立している者は約60%多いことが認められた(OR:1.583, 95%CI:1.121-2.238)。その一方で、運動機能の低下や、閉じこもり、うつ傾向との関連は認められなかった。

表3 避難訓練参加と介護リスクとの関連 ロジスティック回帰分析

	β	オッズ比	95% 信頼区間
性別 (Ref:男性)	- .998	.369 *	.160 - .850
年齢 (Ref:85歳未満)	- .857	.424 ***	.298 - .605
要支援認定 (Ref:なし)	.231	1.260	.759 - 2.094
労働収入 (Ref:なし)	- .098	.906	.572 - 1.436
学歴 (Ref:9年以下)	.277	1.319	.951 - 1.828
世帯状況 (Ref:独居以外)	.282	1.325	.905 - 1.941
主観的健康感 (Ref:低群)	.360	1.434	.994 - 2.068
低栄養 (Ref:なし)	- .459	.632	.163 - 2.451
口腔機能 (Ref:低下なし)	- .415	.661 *	.447 - .977
運動機能 (Ref:低下なし)	- .193	.824	.588 - 1.155
閉じこもり (Ref:なし)	.207	1.230	.732 - 2.067
認知機能 (Ref:低下なし)	.043	1.044	.745 - 1.462
うつ傾向 (Ref:なし)	- .174	.841	.592 - 1.194
手段的日常生活動作 (Ref:4点以下)	.460	1.583 **	1.121 - 2.238
定数	1.451	4.268 **	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
 モデル $\chi^2 = 80.924$, $df = 14$, $p < .001$
 HosmerとLemeshowの検定 $p = .227$, 正判別率 68.7%
 N=886

4. 考察

4.1 避難訓練参加に関連する要因について

避難訓練参加は、女性の6割強に比べ、男性の避難訓練参加の割合は約9割と高かった。このことから、避難訓練は、ほとんどの男性が参加する地域のイベントであると考えられる。また、このようなイベントに参加していない男性は、いきいき教室などの通いの場へも参加しておらず、社会参加をしていない可能性がある。本研究において、閉じこもりや運動機能低下といった社会参加が困難となる要因との関連が見られなかったのも、通いの場の参加者が対象ということで、これらの要因があり社会参加が少ない高齢者が、そもそも含まれていない可能性は否めない。地域とのつながりが希薄な高齢者は、災害時の対応も困難になると考えられるため、地域高齢者全体の防災力を高めるためには、高齢者の実態を把握したうえで、さらなる対応を検討することが必要である。

飯田市では、毎年9月の防災の日に合わせて、住民参加の防災訓練が、市内全20地区で行われる。この訓練では、全住民、および各地区自主防災組織、飯田市消防団、飯田市赤十字奉仕団、飯伊地区包括医療協議会、災害時相互応援協定締結機関・団体等が参加し、安否確認訓練、情報伝達・収集訓練、災害状況把握訓練、消火訓練、人命救助・搬送訓練、物資搬送訓練等により、地域の防災力の向上を目指している¹⁰⁾。飯田市では、このような地域での防災への取り組みが続けられていることから、住民全般の防災への関心は高いと考えられる。そのため、いきいき教室へ参加している高齢者も、心身機能の低下があっても、近隣住民の助けを借りて、避難訓練に参加ができていた可能性がある。この点については、今後、他地域との比較等により、明らかにしていきたい。

介護リスクでは、口腔機能と手段的日常生活動作の低下により、避難訓練参加が少なくなることが示された。口腔機能の低下、いわゆるオーラル・フレイルは、身体機能のフレイルに先行することが報告されている¹¹⁾。本研究の結果では、避難訓練参加には運動機能等の低下との関連は示されず、口腔機能の低下との関連が示された。このことは、身体機能低下が起こる少し前に避難訓練への参加を辞めている可能性が考えられる。飯田市の避難訓練は地区ごとに行われ、地域との結びつきが強いイベントであることも考慮すると、避難訓練に参加しないことは地域との関わりが弱くなっている可能性があり、その原因については、さらに検討する必要がある。

4.2 いきいき教室での防災教室の開催の可能性

本研究では、いきいき教室への参加者における避難訓練参加に関連する要因について検証した。その結果、女性で

あること、85歳以上の高齢者、口腔機能の低下、手段的日常生活動作が自立していない場合は、避難訓練の参加が少ないことが示された。

いきいき教室参加者は女性が多いが、避難訓練参加はその6割強に留まっている。そのため、女性高齢者の避難訓練参加を促進するような働きかけは重要であると考えられる。また、いきいき教室では、既に避難訓練に参加者している高齢者にも、さらに災害への理解を深め、家具等の固定や備蓄等、自助を促進するような介入の実施が可能であると考えられる。

分析結果から、口腔機能が低下してきている高齢者において、避難訓練への参加が少ないことが示された。防災の観点からも、日常的な口腔機能の維持、向上への働きかけが重要であると考えられる。また、このような高齢者は、その他の社会参加も減少する可能性があり、地域とのつながりが希薄になっていくことも危惧される。このことから、高齢者が地域から取り残されないよう、平時からの見守りと災害時の支援体制をシームレスに整備ができれば、より安全・安心な地域づくりとなると考えられる。通いの場が地域と福祉をつなぐ役割を担うことで、平時も災害時も継続した支援が行える体制構築が期待される。飯田市においても、高齢者の防災意識の啓発や、地域の防災対策促進にいきいき教室を活用することは、地域防災を促進するための一助となると考えられる。

4. 3 今後の課題

本研究では、高齢者の過去の避難訓練参加について、現在の生活状況、健康状態で検討している。厳密には、避難訓練実施と同時に参加していない高齢者も含めた調査実施で検討すべきだが、その実施は困難であり、この点においては本研究の限界であると考ええる。

また、本研究の結果は、飯田市に居住する高齢者から得られたもので、高齢者全般から得られた知見ではないため、一般化はできない。さらに、飯田市の高齢者の中でもいきいき教室参加者のみを対象としており、飯田市居住の全高齢者の状況を反映しているものでもない。飯田市の高齢者への防災対策を進めていくためには、他市町村との比較や、通いの場に参加していない高齢者との比較により、飯田市の高齢者の特性や通いの場に参加する高齢者の特性も明らかにする必要がある。これらは、本研究の課題である。今後は、これらの比較分析により、飯田市の高齢者の特性、通いの場の高齢者の特性を明らかにしていきたい。

本研究からの知見は、調査結果の統計的な分析より得られたものである。飯田市の高齢者の防災対策をさらに促進するための具体策を得るためには、本研究結果を踏まえ、避難訓練に参加しなかった高齢者へのインタビュー等による事例研究を実施し、より具体的な対策への示唆を得たい

と考えている。また、今回は自立高齢者を中心とした調査、分析であったが、身体機能が低下し、家族のみでの避難が困難な高齢者等への対応について、事例分析等により課題を抽出したい。

謝辞

本研究の実施に際し、調査にご協力いただいた高齢者、および飯田市職員、いきいき教室運営スタッフの皆さまに感謝申し上げます。また、本論文作成にあたり、飯田市危機管理室 後藤武志次長より資料をいただきました。ここに感謝の意を表します。

尚、本研究は、JSPS科研費 基盤研究 (C) (20K02176) の助成を受けて実施した。

注

- 1) 主観的健康感については、本研究の対象者では、「よい」が274名 (31.0%)、「まあよい」が512名 (57.9%)、「あまりよくない」が92名 (10.4%)、「よくない」が7名 (0.8%) であった。「よい」と回答した約3割の避難訓練参加への影響を検討するため、「よい」以外の回答者をリファレンスとした分析を行った。
- 2) 手段的日常生活動作については5点満点で尋ねたが、5点が376名 (43.1%)、4点が229名 (26.2%)、3点が138名 (15.8%)、2点が82名 (9.3%)、1点が37名 (4.2%)、0点が11名 (1.3%) であった。機能低下の見られない4割強について、避難訓練参加との関連を検討するために、低下がみられる回答者をリファレンスとして分析を行った。

文献

- 1) 国土交通省天竜川上流河川事務所. 三六災害アーカイブス. <https://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/36saigai/help.html> (2021年7月23日参照)
- 2) 飯田市. 飯田市ホームページ 防災. <https://www.city.iida.lg.jp/life/2/9/46/> (2021年7月23日参照)
- 3) 飯田市. 高齢者福祉計画・介護保険事業計画 令和3年度 (2021年度)～令和5年度 (2023年度).
- 4) 厚生労働省 老健局 全国厚生労働関係部局長会議資料 2020年1月17日 https://www.mhlw.go.jp/topics/2020/01/dl/8_roken-01.pdf
- 5) 平井寛, 近藤克則, 尾島俊之, 他. 地域在住高齢者の要介護認定のリスク要因の検討 AGESプロジェクト3年間の追跡研究. 日本公衆衛生雑誌. 56, 501- 512, 2009.
- 6) 竹田徳則, 近藤克則, 平井寛. 地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子－AGES

- プロジェクト3年間のコホート研究. 日本公衆衛生雑誌. 57, 1054- 65, 2010.
- 7) 齊藤雅茂, 近藤克則, 尾島俊之, 他. 健康指標との関連からみた高齢者の社会的孤立基準の検討: 10年間のAGESコホートより. 日本公衆衛生雑誌. 62, 95- 105, 2015.
- 8) 戸川直希, 佐藤翔輔, 今村文彦, 岩崎雅宏, 皆川満洋, 佐藤勝治, 相澤和宏, 横山健太. 津波避難訓練が実際の津波避難行動に及ぼす効果—宮城県石巻市2016年11月22日福島県沖地震津波時の事例—. 土木学会論文集B2 (海洋工学). 73, 2, I_1531-I_1536, 2017.
- 9) 「介護予防のための生活機能評価に関するマニュアル」分担研究班 介護予防のための生活機能評価に関するマニュアル (改訂版). 2009.
- 10) 飯田市 危機管理室. 令和2年度飯田市地震総合防災訓練実施計画. 2020年7月
- 11) 飯島勝矢. 虚弱・サルコペニア予防における医科歯科連携の重要性: ~新概念『オーラル・フレイル』から高齢者の食力の維持・向上を目指す~. 日本補綴歯科学会誌, 7, 92-101, 2015.

IIDAブランド推進事業における津田塾大学の取組 —2020年度、コロナ禍でのIIDA発信を目指して—

For Promoting IIDA Brand: Tsuda University's Projects During COVID-19 Pandemic

津田塾大学 総合政策研究所 客員研究員 大島 幸
津田塾大学 総合政策学部 3年 吉田瑛里香
津田塾大学 総合政策学部 3年 佐藤陽菜子
津田塾大学 総合政策学部 2年 伊藤由美子

Sachi Oshima
Research Institute for Policy Studies, Tsuda University
Erika Yoshida
College for Policy Studies, Tsuda University
Hinako Sato
College for Policy Studies, Tsuda University
Yumiko Ito
College for Policy Studies, Tsuda University

【要旨】

2018年4月に飯田市との包括連携協定を締結して以来、津田塾大学では、学生が主体となって、飯田市で学んだ地域の魅力を更に引き出し、国内外に発信していく活動を続けてきた。本稿では、2020年度、コロナ禍において津田塾生が取り組んだ(1)飯田女子高等学校との高大連携による動画コンテンツ作成、(2)車椅子用水引アクセサリ「Me's」の開発、(3)飯田の魅力を伝える観光動画作成について報告する。

キーワード：人形劇、飯田水引、高大連携、動画コンテンツ

Key Words：Puppet Culture, IIDA Mizuhiki, High School and University Collaboration, Video Contents

1. はじめに

2018年4月に飯田市との包括連携に関する協定を締結して以来、津田塾大学では、学生が主体となって、飯田市で学んだ地域の魅力を更に引き出し、国内外に発信していく活動を続けてきた。数ある飯田の魅力のうち、学生が継続して取り組んできたのが、飯田に綿々と受け継がれる人形劇文化と水引工芸の発信である。

人形劇文化については、2018年8月、飯田市において「世界人形劇フェスティバル」と同時開催された「人形劇の友・友好都市国際協会 (Association Internationale des Villes Amies de la Marionnette (AVIAMA)) 第7回総会」歓迎レセプションにおいて、津田塾大学の学生(以下、「津田塾生」と表記)が総会参加都市の人形劇文化を紹介する英語プレゼンテーションを行った¹。2019年からは飯田に伝わる人形浄瑠璃である黒田人形芝居に取り組む飯田女子高等学校人形劇クラブと高大連携を開始した。2019年6月には津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス祭に同校人形劇クラブを招へい

し、同年8月および2020年2月には津田塾生が飯田女子高等学校を訪問するなど、相互に学校を訪問し、学生・生徒間の交流を続けてきた。

また、飯田水引については、上記の千駄ヶ谷キャンパス祭(2019年6月)および東京シティエアターミナル(T-CAT)で開催された「毎日が旅行博」(2019年11月)に飯田から水引職人の方に来訪頂き、一般向けの水引ワークショップを開催した。また2020年開催(当時予定)の東京オリンピック・パラリンピック(以下、「オリ・パラ」)を見据え、車椅子用水引アクセサリの商品開発に着手した。

かかるなかで、2020年3月、新型コロナウイルス(COVID-19)の全国的な感染拡大が発生した。緊急事態宣言に伴い、大学キャンパスへの学生入構や対面授業の実施自体にも制約が生じるなか、津田塾大学で上級生から下級生へと毎年受け継いできた飯田訪問も叶わなくなった。対面交流が困難な状況で、引き続き飯田の魅力を発信するために何かできるだろうか。本稿では、2020年度、コロナ禍で津田塾生が取り組んだ3つのプロジェクト——(1)高大連携による

¹ AVIAMAでの英語プレゼンテーションの詳細については、『学輪』第5号(大島・伊藤, 2019)、『津田塾大学総合政策研究所報』(大島ほか, 2019)に記載している。

動画コンテンツ作成、(2) 車椅子用水引アクセサリ「Me's」開発、(3) 飯田の魅力を伝える観光動画作成——について報告する。

2. 飯田女子高等学校×津田塾大学、高大連携による動画コンテンツ作成

2. 1 2019年度までの経緯

飯田女子高等学校との交流は2019年に開始した。同年6月の津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス祭に、同校人形劇クラブを招き、東京公演を開催したのが端緒となった。高校生が一生懸命に黒田人形芝居に取り組む姿を目の当たりにした津田塾生は、飯田女子高生の姿を広く発信したいと考えた。同年8月、津田塾生が同高校を訪問し、人形劇クラブ部員と交流を重ねていくうちに、さらにその思いを強くし、伝統人形劇に取り組む同高校人形劇クラブの紹介動画を作成し、YouTubeを活用して国内外に発信することを計画した。

飯田女子高等学校訪問後の2019年9月より、津田塾生にて、制作する動画コンテンツの具体的な内容・構成の検討を開始した。次第に、人形劇に取り組む飯田女子高生が「どのような思いで人形劇に取り組んでいるのか」、また彼女たちの活動を日々ご覧になっている先生方が「高校生が人形劇に取り組む姿を見て何を感じているか」など、具体的な話を直接伺い、動画コンテンツに収めたいと考えたようになった。同高校とやりとりを重ねた結果、2020年2月に津田塾生が飯田女子高等学校を再訪し、有馬乃校長先生、人形劇クラブ顧問（当時）の中島真典先生、人形劇クラブ部員へのインタビューと動画撮影を行うことができた。すなわち、COVID-19流行直前に、かろうじて動画の素材を収集できていたことになる。

2. 2 2020年度の達成目標

伝統文化の後継者となる高校生が誇りをもちながら黒田人形芝居に取り組む姿を、日本及び世界に発信する動画として制作・公開すること。

2. 3 動画コンテンツ作成プロセス

2020年2月に実施した人形劇クラブ部員へのインタビューでは、入部したきっかけ・伝統人形劇に対する思い・公演の思い出・今後の展望などについて、生の声を聞くことができた。全ての部員に共通していたのは、飯田市の伝統文化である黒田人形芝居に誇りを持って取り組み、文化の発展を願っているということだった。また、有馬校長先生や顧問の中島先生からは、教師から見た部員たちの成長

や、伝統人形劇に取り組む部員たちへの思いも聴くことができた。これらインタビューをもとに、黒田人形芝居に向き合い成長していく女子高生の姿を通し、伝統継承の意味や重要性について視聴者（特に若者世代）に訴えかけられるような動画を制作したいと考えた。

人形劇クラブ部員や同高校の先生方の思いを短時間の動画で効果的に視聴者に伝えられるよう、何度も試行錯誤を繰り返した。動画視聴者に、単なるインタビューの抜粋という印象を与えるのではなく、メッセージが伝わる動画となることが重要と考え、編集作業を続けた。なお制作中は、飯田女子高生ともLINE（アプリケーション）を活用し、やりとりを重ねた。特に、津田塾生がインタビューの抜粋・編集を行う過程で、本来の取材内容から逸脱した内容になっていないか、誤ったメッセージを届ける動画になってしまっていないか、といった点には細心の注意をはらった。そのため、人形劇クラブ部員が人形劇で担う役割（人形遣い、太夫、三味線、語りなど）を再確認するとともに、動画内容に間違いがないか、インタビューで実際に話された内容と動画制作側の解釈との間に齟齬がないかなどを確認し、動画の改良に努めた。

また、人形劇クラブはこれまで数々の公演を行っているが、インタビューを進めるなかで、とりわけ2019年10月に台湾で開催され、同クラブが招待された「雲林国際人形劇フェスティバル（国際偶戯節）」での公演が、彼女たちの成長に大きく影響した印象を受けた。同高校の協力により、台湾公演の映像やその時の練習風景を収めた動画を提供いただくことができ、それらも動画コンテンツ内に加えることにした。

完成した動画コンテンツは、インタビュー風景、台湾公演の映像に加え、2019年度の飯田女子高等学校との交流時に撮影した写真などを盛り込んだ、視覚に訴える内容となった。さらに、「日本を超えて飯田の人形劇文化を発信する」という目的を達成するため、日本語字幕バージョン（日本語版）と英語字幕バージョン（英語版）の2種類の動画を制作した。

完成した動画のダイジェスト版(<https://youtube.com/JxdHZEVovNY>)は、2021年1月の飯田学輪大学(<https://youtube.com/VNjbqgul7kI>)および2021年2月のIIDAブランディングセッション・プレス報告会²にて公開した。全編（全11分）は、津田塾大学梅五輪プロジェクトのYouTubeチャンネル内で公開している（日本語版<https://youtu.be/uf-GGDwm4E>／英語字幕版https://youtu.be/iqW2pBYFT_k）。

² IIDAブランディングセッション・プレス報告会については、飯田市「リニア未来都市ブランディング事業」の公式サイト「IIDA2027.com」(https://iida2027.com/2021-02-16_session/)に掲載されているほか、南信州新聞（2021年2月18日付）にも記事掲載された。また、「津田塾大学梅五輪プロジェクト」ホームページにも、津田塾生が報告を掲載している（<https://umegorin.com/news/854/>）。

3. 車椅子用水引アクセサリ「Me's」開発

3. 1 2019年度までの経緯

2019年6月に飯田水引を用いた商品開発を開始した。2020年東京オリ・パラを見据え、水引を使ってどのような商品を作るか、水引を利用してどのようにオリ・パラを盛り上げていくか等について議論を重ねるなかで、パラアスリートが自由自在に車椅子を操る姿に目が留まった。各選手の車椅子を見ると、ハンドリム（車椅子を手でこぐ際に使用する、後輪の外側についている輪）部分の色が鮮やかな車椅子モデルは存在するものの、車輪部分については車椅子モデルによる差別化が図られていないように思われた。そこで、車椅子の車輪部分を彩る、飯田水引を使用した車椅子スポークアクセサリを制作することを発案した。

試作品の制作にあたっては、飯田市役所IIDAブランド推進課に協力を仰ぎ、津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス祭（2019年6月）等での水引ワークショップに来訪いただいた飯田市の関島水引店に参画いただくことになった。

2019年7月に試作品1が完成した。梅結びや淡路結びなどの水引の裏側に名札用のクリップ（図1参照）を付け、車椅子のスポークをクリップで挟み込むことで装着することにした。この試作品1は、7月6日に津田塾大学にて開催された特別シンポジウム「東京2020パラリンピックが導くダイバーシティ進化論」（主催：日本経済新聞社オリンピック・パラリンピック推進室、清水建設、津田塾大学）にパネリストとして登壇したパラ水泳の花岡恵梨香選手（当時本学大学院生）の車椅子に装着され、会場にて披露された。会場からは「スポーク部分に水引を装着する工夫で、車椅子がこんなにも華やかになるとは」という好意的な反応があった一方、「水引アクセサリが大きすぎたり、左右非対称の結び方だったりすると、車椅子の走行に支障が出



図1 Me's表面・横面

るのではないか」という指摘も寄せられた。それらを踏まえ、水引アクセサリの大きさを車輪に影響を与えない程度に改良し、結び方も左右対称の梅結びに決定した。

2019年9月に試作品2が完成した。この段階では、主に車椅子装着部分の部品、及び水引アクセサリの色の組み合わせについて検討を行った。特に、装着部分については、試作品1で使用した名札用クリップを引き続き活用する形で良いか、それとも別の部品が活用できるか、検証する必要があった。そこで、試作品2では自転車のスポークに装着するアクセサリに梅結びの水引を装着し、試すこととした。2020年2月、飯田女子高等学校への取材（上記2.参照）の機会を捉え、津田塾生が飯田市役所を訪問し、飯田市IIDAブランド推進課・関島水引店の立会いのもと、実際に車椅子を動かして装着部品について比較検討を行った。その結果、装着部分の部品は、試作品1にて使用した名札用クリップの方が良く、さらに、車椅子のスポークが交差する部分に装着する仕様とすることで、車椅子走行中もアクセサリが取れにくいことが分かった（図2参照）。



図2 Me'sを車椅子に装着した様子

3. 2 2020年度の達成目標

2020年東京オリ・パラを契機に、飯田水引を使った商品開発をすることで、世界に飯田水引を広めること。

3. 3 車椅子用水引アクセサリ開発プロセス

2020年3月、飯田市から、試作品3が完成し津田塾大学に送いただいた旨の知らせを受けた。しかし、COVID-19の感染拡大・第1回目緊急事態宣言発令に伴い、学生・教職員の大学キャンパス入構が急遽困難となった。緊急事態宣言解除後、キャンパス入構が叶った教員が試作品3をキャンパスで受け取り、学生に送付した。商品開発を担う学生の手元に届くことになったのは、5月であった。

2020年7月、試作品3を用いて、モニター調査を行った。パラ水泳の花岡恵梨香選手（当時本学OG）、および車椅子を使用している知人2名に協力を仰いだ。モニター調査の結果、「高齢者に向けた落ち着いた色の組み合わせが欲しい」、「握力によってはアクセサリの装着が難しい」、「水

引アクセサリが走行中に車輪から外れてしまう」などの意見を得た。そこで、装着部分の部品を金属製からプラスチック製のものに変更し、軽量化をはかった。さらに、名札用クリップに付いている安全ピンを取り除くことで、水引アクセサリが車椅子に装着しやすくなるかを試みた。この2点の改良により、走行時の振動によるズレが発生しにくくなり、水引アクセサリが走行中に車輪から外れてしまう問題が解決された。

2020年11月³には水引アクセサリのPR動画制作を開始した。PR動画制作にあたり、これまで協力を仰いできた花岡選手に出演を依頼した。本学OGのパラ水泳選手であることに加え、水引の語源の一つとされている「水にひたして引く」が水泳という競技に非常に親和性が高いと感じたためである。学生2名で花岡選手の勤務先である清水建設株式会社本社を訪問し、勤務中の様子や水引アクセサリを装着している車椅子の映像を撮影した。また、競技中の映像を花岡選手から提供いただき、動画内で使用することにした。

2021年1月に水引アクセサリの名前を決定した。学生間でオンライン会議を重ね、「水引」という語から連想する形でアイデアを出し合い「Me's (ミーズ)」と決定した。この名前には、①水引の「水」、そして、英語で自分を表すMeに所有の意味を表す「s (アポストロフィ・エス)」をつけることで②「私のもの」という2つの意味を掛け合わせた。なお、「私のもの」という意味を表すには、本来mineを用いるが、アポストロフィがMeに添えられたアクセサリにも見えることから、あえて「Me's」と表記し、遊び心も含めて考えた。水引で自分らしさを表現する手助けをしたいという津田塾生の思いを込めている。

完成した動画(全46秒)は2021年2月のIIDAブランディングセッション・プレス報告会⁴で披露した。現在は津田塾大学梅五輪プロジェクトのYouTubeチャンネル内で公開している(<https://youtu.be/5WGIzD74dec>)。

3. 4 卒業・修了式のマスクチャームに発展

なお、この水引アクセサリ開発は、2021年3月に举行された津田塾大学卒業・修了式にも生かされることとなった。例年、保護者や下級生も集い盛大に行われる卒業・修了式だが、2020年度は、キャンパス入構が卒業生・教職員に限られ、さらに学科別に時間帯を分けての実施となった。その寂しさを少しでも跳ね返そうと考えられたのが、飯田



図3 卒業・修了式に用意された水引マスクチャーム

水引マスクチャームであった。梅の花をあしらった飯田水引マスクチャーム(図3参照)は、本プロジェクトに関わる下級生と教員の手により一つ一つ袋詰めされ、卒業・修了生のマスクに彩りを添えることとなった⁵。

4. 飯田の魅力を伝える観光動画作成

上記2.および3.のように、2019年度から継続して取り組んできたプロジェクトに加え、コロナ禍でも取り組める飯田の魅力発信プロジェクトとして、新たに飯田市観光動画づくりを企画した。

4. 1 2020年度の達成目標

飯田の魅力を日本のみならず、海外の視聴者にも伝える観光動画を制作すること。コロナ禍で旅行に制約が生じているなか、動画視聴者が飯田に行ったような気分を味わい、COVID-19感染状況の収束後に飯田を訪れたいと思うような動画を目指す。

³ 2020年11月は、津田塾大学「第4回津田ヶ谷祭(旧・千駄ヶ谷キャンパス祭)」(2020年はコロナ禍のため、初めてオンラインにて実施)においても、飯田水引を取り入れた活動を行った。飯田市役所IIDAブランド推進課および男女共同参画課に協力いただき、飯田市役所と津田塾生とをZoomでつなぎ、オンライン上での水引ワークショップを企画したものである。キャンパス祭当日は、飯田市役所からの遠隔指導のもと、津田塾生が飯田水引でシトラスリボンを作り、その様子を生配信した(<https://www.city.iida.lg.jp/site/covid19/sitorasuribon.html>)。

⁴ 脚注2参照。

⁵ 卒業・修了式に飯田水引のマスクチャームが彩りを添えた様子は、信濃毎日新聞(2021年3月18日付)、中日新聞(2021年3月19日付)、南信州新聞(2021年3月20日付)に取り上げられたほか、津田塾大学ホームページ(2021年3月24日付)でも紹介された。

4. 2 観光動画コンテンツ作成プロセス

2020年2月、飯田女子高等学校人形劇クラブの取材（上記2. 1参照）のため、津田塾生4名が飯田を訪問した際、飯田女子高等学校での動画撮影以外に、飯田市内各地の動画・写真を撮影した。また、飯田での暮らしについて直接学ぶため、飯田市役所のアレンジにより農家民泊も行い、農家の方から直接話を聞くとともに、民泊での各種体験も記録に収めていた。これらの動画・写真を未使用のままにするのはあまりに勿体ない、飯田にはこれだけ素晴らしい場所があるのだから、別途、観光動画を作ってはどうかと着想し、動画作成を開始した。

本観光動画を作る上で念頭においたのは、この動画の視聴者が「飯田に行ってみよう」という動画を目指すことであった。そのため、本動画では、人形時計塔、飯田市川本喜八郎人形美術館や天龍峡など、飯田の名所を多く紹介しつつ、さらに実際に飯田を訪れたからこそ分かる魅力も取り入れようと努めた。長姫神社の手水が温泉で温かいことを体験動画で紹介したほか、農家民泊中に薪で風呂を沸かしたり、五平餅を作ったりしている様子を盛り込んだのは、そのためである。

実際に動画作成を進めていくにつれ、単に飯田の名所や民泊体験を盛り込むだけでは、動画として単調になりがちであり、視聴者を引き込む更なる工夫を要することが分かった。そこで、「魅せる」動画にするために、動画のトーンに緩急をつけ、画面のアニメーションや音楽も工夫した。完成に至るには、幾度も動画の構成やナレーションの修正を繰り返した。なお、本動画はYouTube上に公開し、日本のみならず海外の視聴者にも見てもらうことを想定していたため、日本語字幕だけでなく、英語字幕をつける作業も行った。

完成した動画のダイジェスト版は、上記2. および3. 同様、2021年2月のIIDAブランディングセッション・プレス報告会にて披露した。全編（全2分50秒）は、津田塾大学梅五輪プロジェクトのYouTubeチャンネル内で公開している（<https://youtu.be/VCGXZwgj6lg>）。

5. 終わりに・今後の展望

本稿では、2020年度に津田塾生が取り組んだ（1）飯田女子高等学校との高大連携による動画コンテンツ作成、（2）車椅子用水引アクセサリ「Me's」開発、（3）飯田の魅力を伝える観光動画作成について、主な経緯を記してきた。コロナ禍で飯田・東京間の物理的な往来が困難な状況のなか、IIDAブランド発信に向けた取り組みを継続できたのは、ひとえに2019年度までに関係を築くことができた飯田市IIDAブランド推進課、飯田女子高等学校、関島水引店ほか諸関係者のご支援にあると考えている。

2020年度に制作完了した上記（1）及び（3）の動画コンテンツについては、動画完成に満足せず、引き続きより多くの視聴者にアクセスするための方策を練っていきたい。また、高大連携と水引商品開発については、以下のとおり活動を継続している。

飯田女子高等学校との高大連携については、いまだCOVID-19感染拡大が収束せず、対面での交流が難しいが、オンラインツール等を生かしながら、今後も交流を続けていきたい。2021年7月には、初の試みとして、人形劇クラブ部員も含めた飯田女子高生と津田塾生との交流をオンライン上で行なった。人形劇に関する話題だけでなく、双方が高校・大学で取り組んでいる研究を紹介し合うなど交流の幅を広げることができた。また、人形劇クラブ部員とは、今後も人形劇の魅力発信に向けて、協力して活動していきたいという思いを確認することができた。人形劇公演をより多くの人に届ける方法を考えたり、黒田人形芝居のみならず飯田の魅力を飯田女子高生と津田塾生と一緒に発信したりする活動をしたいと考えている。

車椅子用水引アクセサリ「Me's」についても、2020年度に引き続き、関島水引店の協力のもと試作品の改良・検証を続けている。今後、さらなるモニター調査の実施、販売形態についての検討を重ね、車椅子を利用する方にとって使いやすく、かつ入手しやすい製品としたい。水引には、人と人を結ぶという意味合いがある。世界に誇る日本の伝統工芸品の一つとして、人々の気持ちをつなぐ、絆の象徴のような製品になるようにという思いを込めて開発を行っている。

COVID-19以前の活動が全面的に可能になるまでは、いまだ相応の時間を要するものと思われる。2018年の包括連携協定以来、上級生から下級生へと受け継いできた飯田との関わりを大切に、大学生の視点で飯田の魅力を発信すべく、引き続き、取り組んでいきたい。

謝辞

本稿に記したプロジェクトは、津田塾大学総合政策学部・伊藤由希子教授の指導のもと、津田塾大学連携推進センターの支援を得て遂行されました。本プロジェクト実現にあたり多大なるご尽力とご協力をいただいた、飯田市、飯田女子高等学校、関島水引店、ならびに関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

参考文献

IIDA2027.com. (2021). 「IIDAブランディングセッション・プレス発表会」. IIDA2027.com.
https://iida2027.com/2021-02-16_session/

南信州新聞. (2021, 2). 「3 団体がプロモ成果報告」. 『南信州新聞』 (2021年2月18日付) .

<https://minamishinshu.jp/news/local/%ef%bc%93%e5%9b%a3%e4%bd%93%e3%81%8c%e3%83%97%e3%83%ad%e3%83%a2%e6%88%90%e6%9e%9c%e5%a0%b1%e5%91%8a.html>

南信州新聞. (2021, 3). 「津田塾大 門出に花を添える『水引』でマスクチャーム」. 『南信州新聞』 (2021年3月20日付).

大島幸、伊藤由希子. (2019). 「人形劇芸術を通じた国際文化交流体験とその発信について 一飯田市における2018年人形劇の友・友好都市国際協会総会から一」. 『学輪』第5号, 53-63.

大島幸、山口もね、増田珠美、中川智恵. (2019). 「人形劇の友・友好都市国際協会総会サポートを通じた国際文化交流」. 『津田塾大学総合政策研究所報』 . <https://cps-labs.tsuda.ac.jp/2019/07/19/>

信濃毎日新聞. (2021). 「飯田の水引マスク彩る卒業式」. 『信濃毎日新聞』 (2021年3月18日付) .

<https://www.shinmai.co.jp/news/article/CNTS2021031800077>

寺岡葵. (2021). 「飯田水引 門出に花添え」. 『中日新聞』 (2021年3月19日付、南信版) .

https://www.chunichi.co.jp/article/220643?rct=nagano&fbclid=IwAR3xgd9EzDsTA4VVSRb44KRt7_fY_5ON-glUluoRibgzbedCGrocqtu_mtX8

津田塾大学. (2021). 「卒業式を彩る飯田市特産の水引によるマスクチャーム」. 『津田塾大学ホームページ CAMPUS REPORT』 (2021年3月24日付) .

https://www.tsuda.ac.jp/student-life/campusreport/2020/0317_02.html

大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

【学輪IIDAの趣旨】

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田に価値や関心を有する大学研究者のネットワーク組織です。

飯田と大学との1対1の関係から、飯田を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するため、平成23年1月に設立されました。

学輪IIDAのコンセプトは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていこうとする試みです。大学研究者の有機的なネットワークの形成を通じて、大学の専門的な知見や人材を地域に呼び込み、これまで飯田が培ってきた経験や取組と融合することで、地域の課題解決や付加価値を高めていくような新しい形の大学的な機能の構築を追求していく挑戦でもあります。

学輪IIDAは、役職や規約などの無い緩やかな（平らな）ネットワーク組織です。共通のキーワードは「飯田」であり、大学研究者による「ボトムアップ」で「ボランティア」な活動を基本としています。設立当初19大学43名だった大学研究者の参画も、これまでの様々な活動を通じて、令和3年12月末日現在では73大学・機関、139名もの大学研究者が参画するまでに至り、ネットワークの輪が広がってきています。

学輪IIDAの知のネットワークを通じて、「地域（内部）の知」と「大学（外部）の知」が融合する「共創の場」を創出し、持続可能性を追求する地域として、様々なモデル的な取組を多様な主体の連携と協働のもと進めていきます。

【学輪IIDAのこれまでの主な取組】

1 大学連携会議「学輪IIDA」の設立

（平成23年1月29日～30日）

飯田と関係の深い大学研究者が一堂に会し、今後の方策等について検討するため「大学連携会議」を開催した。会議の名称を「学輪IIDA」とし、様々な提案、課題等の中から、現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体的な行動を起こしていくため「プロジェクト会議」を設置していくことを確認した。

2 大学連携会議「学輪IIDA」全体会

学輪IIDA全体会は、年に一度学輪IIDAメンバーが飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、学輪IIDAの今後のあり方や具体的な取組に関する検討及び学輪IIDAの取組を市民など多くの方に知っ

てもらふことなどを目的に開催するもの。

例年、1月下旬の土日2日間で開催しており、土曜日は誰でも参加可能な「公開セッション」を、日曜日は学輪IIDAメンバーによる「内部討議」を開催している。

○平成23年度学輪IIDA全体会

（平成24年1月28日～29日）

学輪IIDA全体会「公開セッション」を初めて開催した。初回開催のため、参加研究者による自身の専門領域や飯田との関わり、関心事項などに関するプレゼンテーションを行った。

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議やウェブサイト構築など、今後の取組に関する検討を行った。2日間で、17大学31名のメンバーが参加した。

○平成24年度学輪IIDA全体会

（平成25年1月26～27日）

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び地域と大学との連携による地域づくりの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

【大学の実践事例報告会】

①豊橋技術科学大学シャレットワークショップ

豊橋技術科学大学 大貝 彰 教授

②デジタルプラネタリウム共同プロジェクト

和歌山大学 尾久土 正己 教授

③参加型地域社会開発（PLSD）研修

日本福祉大学 大濱 裕 准教授

【学輪IIDAプロジェクト会議報告】

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

②飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学 小畑 力人 教授

【パネルディスカッション】

テーマ：地域と大学との連携による地域づくりの可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

東京農工大学大学院農学研究院

朝岡 幸彦 教授

飯田女子短期大学

高松 和子 教授

南信州・飯田フィールドスタディ講師

桑原 利彦 氏

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議の今後の取組や、旧飯田工業高校後利用に関する将来展望や具体的

な整備などについて意見交換した。2日間で、18大学33名のメンバーが参加した。

○平成25年度学輪IIDA全体会

(平成26年1月25～26日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「学びの場 飯田」の魅力や可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①地域社会システム調査実習

東京農工大学 朝岡 幸彦 教授

②法政大学西澤ゼミフィールドワークの取組

法政大学 西澤 栄一郎 教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

②飯田における伝統工芸の活性化に向けた調査報告

京都外国語大学 高島 知佐子 講師

③飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学 小畑 力人 教授

④知のネットワークを活用した人材育成に向けた取組

法政大学 高柳 俊男 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「学びの場 飯田」の魅力や可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

豊橋技術科学大学建築・都市システム学系

大貝 彰 教授

東京大学大学院教育研究科 牧野 篤 教授

「内部討議」では、各研究者の感じる飯田の価値・魅力・可能性に関する意見交換、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組及び学輪IIDA紀要作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、17大学32名のメンバーが参加した。

○平成26年度学輪IIDA全体会

(平成27年1月24～25日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び右肩下がりの時代における持続可能な地域の実現をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①法政大学国内スタディージャパン研修

法政大学：高柳 俊男 教授

②グローバルシティ・飯田における多文化共生

上智大学：蘭 信三 教授

宮崎産業経営大学：福本 拓 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

和歌山大学：藤田 武弘 教授

立命館大学：平岡 和久 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地方消滅時代における飯田下伊那

－右肩下がりの時代における持続可能な

地域の実現のために－

コーディネーター：

しんきん南信州地域研究所 林 郁夫 所長

パネリスト：

首都大学東京教養学部：大杉 覚 教授

立命館大学政策科学部：森 裕之 教授

京都大学大学院経済学研究科：諸富 徹 教授

「内部討議」では、旧飯田工業高校後利用に関する検討、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組、及び学輪IIDA機関誌作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、21大学38名のメンバーが参加した。

○平成27年度学輪IIDA全体会

(平成28年1月23～24日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

東洋大学 小林 正夫 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授

東京大学大学院工学系研究科 瀬田 史彦 准教授

一般財団法人日本経済研究所 大西 達也 調査局長

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校活用構想案に関する説明、学輪IIDAの活動を支える知の拠点のあり方、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、20大学32名のメンバーが参加した。

○平成28年度学輪IIDA全体会

(平成29年1月21～22日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、信州大学航空機システム共同研究講座の開講についての報告及び「様々な「知」や「人財」が共鳴して集う地域の実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生

飯田OIDE長姫高校商業科

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

[信州大学航空機システム共同研究講座報告]

信州大学航空機システム共同研究講座の開講について

信州大学 柳原 正明 特任教授

[パネルディスカッション]

テーマ：様々な「知」や「人財」が共鳴して集う

地域の実現に向けて

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

名城大学副学長 都市情報学部

福島 茂 教授

和歌山大学観光学部長 観光学部

藤田 武弘 教授

京都外国語大学外国語学部

堀口 朋亨 准教授

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、24大学42名のメンバーが参加した。

○平成29年度学輪IIDA全体会

(平成30年1月20～21日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、高等学校による活動紹介及び「イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[基調報告Ⅰ 学輪IIDA実践事例]

①飯田市を基盤とした地域社会と教育の結びつき

～LBS JAPAN TREK 2017 IN IIDA CITYを

事例として～

京都外国語大学 堀口 朋亨 准教授、学生

②学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの取組

静岡文化芸術大学 高島 知佐子 准教授

[基調報告Ⅱ 活動紹介]

地域人教育の取り組みについて

飯田OIDE長姫高等学校 Sturdyegg

[フリーディスカッション]

ファシリテーター：立命館大学 平岡 和久 教授

議論提起： 法政大学 石神 隆 教授

フリーディスカッション（自由討議）：

会場参加者

「内部討議」では、「産業振興と人材育成の拠点」活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する情報共有などを行った。2日間で、26大学46名のメンバーが参加した。

○平成30年度学輪IIDA全体会

(平成31年1月26～27日)

「公開セッション」では、高等学校による活動紹介、大学連携の事例報告、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告及び「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」をテーマにした全体討議を開催した。

[高校の活動紹介]

En e - 1 G P S U Z U K Aの取り組みについて

飯田OIDE長姫高校原動機部

[大学連携の事例報告《ポスターセッション》]

[全体討議]

テーマ：知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について

ファシリテーター：和歌山大学 藤田 武弘 教授

事例報告：立命館大学 平岡 和久 教授

名城大学 福島 茂 教授

松本大学 田開寛太郎 専任講師

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、産業振興と人材育成の拠点(エス・バード)、飯田市域学連携交流施設の視察と活用に関する情報共有、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、26大学36名のメンバーが参加した。

○令和元年度学輪IIDA全体会

(令和2年1月25～26日)

「公開セッション」では、学輪インターユニバーシティオープンキャンパス、学輪IIDA 高大連携の取組報告、信州大学の活動紹介及び「知のネットワーク活用による真の地方創生実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパスイベント]

実施内容の詳細は、後述。

[高大連携の取組報告]

立命館大学 平岡 和久 教授
和歌山大学 藤田 武弘 教授
参加高校生からの報告 飯田OIDE長姫高校
下伊那農業高校
飯田女子高校

飯田OIDE長姫高校商業科 國松 秋穂 教諭

[全体討議]

テーマ：知のネットワーク活用による真の地方創生実現に向けて
～「知」を創造し、「知」がひとを呼び、発展する「まち」のカタチ～

コーディネーター：東京家政学院大学

廣江 彰 学長

パネリスト：豊橋技術科学大学

井上 隆信 副学長

和歌山大学 藤田 武弘 教授

南信州・飯田産業センター

萩本 範文 専務理事

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、30大学38名のメンバーが参加した。

○令和2年度学輪IIDA全体会

(令和3年1月22～23日)

「公開セッション」では、10周年記念セッションとして「知のネットワークへの挑戦～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～学輪IIDA. NEXT10」をテーマにしたディスカッションを開催した。

[10周年記念セッション]

テーマ：知のネットワークへの挑戦～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～

学輪IIDA. NEXT10

コーディネーター：法政大学 石神 隆 名誉教授

発言者：東京農工大学農学研究院 朝岡 幸彦 教授
日本観光ホスピタリティ教育学会

小畑 力人 会長

法政大学国際文化学部 高柳 俊男 教授

立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授

和歌山大学観光学部 藤田 武弘 教授

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間

で、24大学30名のメンバーが参加した。

3 学輪IIDAプロジェクト会議の設立

(平成23年3月23日)

平成23年1月の大学連携会議において確認された提案、課題、意見等を踏まえ、今後実現可能な取組等について議論し、具体的な方向性を見出すことを目的に開催した。

学輪IIDAにプロジェクト会議を設置し、旧飯田工業高校の利活用、地域課題にテーマにした共同研究の実施、学輪IIDAウェブサイトの構築などに取り組んでいくことを確認した。

○旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の設立

(平成23年9月12日)

旧飯田工業高校の「教育施設としての活用可能性」について、様々な角度から検討することを目的に設置された。南信州・飯田フィールドスタディなど現在の大学連携の取組からの積み上げと、リニア時代を意識した大学的な機能の2つの視点で検討していくことを確認した。

プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「飯田工業高校後利用プロジェクト報告」(追手門学院大学社会学部・小畑力人教授)を参照。

旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の主な取組(歩み)は、以下のとおり。

(平成23年度)

プロジェクト会議を設立するとともに、大学院大学の設置可能性検討に向け、岐阜情報科学芸術大学院大学を視察した。また、プロジェクト会議の趣旨や検討状況について、学輪IIDA全体会公開セッションで報告するとともに、内部討議にて今後の取組について意見交換した。

(平成24年度)

旧飯田工業高校の教育的な施設の活用の可能性について検討した。旧飯田工業高校の後利用検討に向けては、「飯田で何を学ぶのか」といった理念やコンセプトの検討が重要であること、その理念やコンセプトを実現に向け教育目的の達成に必要なカリキュラムの構築が必要であること、及びその教育を実践するために必要な施設の有効な活用について検討することが重要であることが確認された。

また、リニアを活かした大学的な機能の視点として、共同教育課程、連合大学院、大学院大学の設置可能性などについて調査、研究していくこととした。

(平成25年度)

旧飯田工業高校施設が、目指すべき地域像の実現に向けた地域振興や人材育成の拠点となることが重要であるとの認識のもと、その役割を担うことができる教育・研究施設(機関)としての活用可能性について検討した。旧

飯田工業高校を活用した教育・研究施設（機関）には、新しい価値を創発していく機能（価値創発機能）や新しい形の大学機能が必要であるとの認識のもと、様々な人材、知識、経験、情報等が交差する「ナレッジ・スクエア」構想と、その活動に必要とされる施設のあり方について整理した。また、ナレッジ・スクエアとしての活用や実践を経て、将来的には高等教育機関（大学院大学）やコンベンション施設の設置可能性について検討した。（平成26年度）

旧飯田工業高校を活用したナレッジ・スクエア構想について引き続き検討した。また、飯田市が実施した「大学院大学設置可能性調査事業」の一環で開催した「南信州における高等教育機関のあり方について考える」シンポジウムにおいて、旧飯田工業高校を研究教育施設として活用する具体案としてナレッジ・スクエア構想と大学院大学の設置可能性について発信した。

（平成27年度）

旧学校施設を活用した類似施設の調査として、「三鷹ネットワーク大学」と「IID世田谷ものづくり学校」の視察を行い、地域との親和性、学校施設を使用することの意義、施設運営には多様な主体の積極的な関わりが重要であること等を確認した。

また、学輪IIDA全体会内部討議にて、南信州広域連合を中心に検討してきた旧飯田工業高校利活用構想案「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の知の拠点整備構想案」の考え方と、プロジェクト会議にて導き出した「ナレッジ・スクエア構想」の考え方の親和性を確認するとともに、これまでのプロジェクト会議を引き継ぎ、知の拠点形成に向け検討するプロジェクト会議を設置することを確認した。

○知の拠点プロジェクト会議の設立

（第1回プロジェクト会議：平成28年3月5日）

第2回プロジェクト会議：平成28年10月8日）

旧飯田工業高校施設を活用した知の拠点の形成に向け、学輪IIDAに有志メンバーによる「知の拠点プロジェクト会議」を設立した。

第1回プロジェクト会議では、知の拠点の全体像、知の拠点の機能を高める「共創の場」、地域振興の知の拠点や大学サテライト・研究室のあり方などを中心に意見交換した。またプロジェクト会議として、知の拠点の目指す姿やその実現に向け、引き続き情報等共有しながら検討を進めていくこと、リニア時代を見据えこの地域にどのような知の拠点が必要であり、そこで如何にして魅力を形成し人財を引き寄せる磁力を形成し発信していくかなど、本質的な議論を進めていくことを確認した。

第2回プロジェクト会議では、第1回プロジェクト会

議以降の旧飯田工業高校施設の利活用に関する検討経過や、施設所有者である県の方針決定や南信州広域連合の方針内容について説明するとともに、知の拠点の重要な機能を担う共創の場のあり方等について意見交換した。

○共通カリキュラム構築プロジェクト会議の設立

（平成23年10月4日）

飯田に関わってきた大学研究者が有する飯田の価値を集約し、共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実践を通じて、飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルを構築することを目的にプロジェクト会議を設置し、共通カリキュラムの基本的な考え方や今後の取組について検討、確認した。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」（立命館大学 平岡和久教授）を参照。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の主な取組（歩み）は以下のとおり。

（平成23年度）

●プロジェクトメンバーによるシラバス案の作成と学習会

プロジェクトメンバーが有している飯田の価値、関心事項を取り入れたシラバス案を作成。12月11日～12日にプロジェクト会議を開催し、各教員が作成したシラバス案の確認や学習会を開催する。

今後、シラバス案を元にしたモデルカリキュラムの作成と実践を、複数大学が連携しながら取り組んでいく方向性を確認した。

（平成24年度）

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、しんきん南信州地域研究所及び市が連携し、大学の専門性と飯田でのフィールドスタディを組み合わせたモデルカリキュラム作成と実践に向け取り組んだ。地域の持続可能性に関する要素、要因を明確化するため、飯田のソーシャルキャピタル（社会関係資本）を可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を、総務省の「域学連携」地域づくり実証研究事業の受託事業として実施し、3大学29名の大学研究者や学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」（名城大学 福島茂教授）を参照。

（平成25年度）

●地域環境政策フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学及び市の連携のもと、飯田における環境モデル都市の取組や多様な主体の実施体制を学ぶカリキュラムとして「地域環境政策フィールドスタディ」を実施し、3大学28名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「環境をテーマにしたモデルカリキュラムの作成と実践」(立命館アジア太平洋大学 銭学鵬准教授)を参照。

(平成26年度)

●南信州飯田ニューツーリズムフィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学及び市の連携のもと、農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性を探るカリキュラムとして「ニューツーリズムフィールドスタディ」を実施し、4大学37名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第2号における「南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ(共通カリキュラム構築プロジェクト)の成果と課題」(和歌山大学 藤田武弘教授)を参照。

(平成27年度)

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、飯田における社会関係資本の重層的蓄積を学ぶカリキュラムとして「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を実施し、4大学41名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第3号における「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ 2015」(東洋大学 小林正夫教授)を参照。

(平成28年度)

●地域経営論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、地域経営の概念、地域経営の現状、成果や課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域経営論フィールドスタディ」を実施し、5大学50名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第4号における「『地域経営論フィールドスタディ』の実施報告」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

(平成29年度)

●地域文化論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学・静岡文化芸術大学及び市の連携のもと、飯田の人々の地域への愛着や帰属意識を地域文化の観点から明らかにするこ

とを通じて地域活性化を実現するための地域アイデンティティの形成のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域文化論フィールドスタディ」を実施し、5大学46名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第5号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト地域文化論フィールドスタディ 2017」(静岡文化芸術大学 高島知佐子准教授)を参照。

○学輪インターユニバーシティオープンキャンパスプロジェクト

大学の研究力に期待する社会的な状況がある中、学輪IIDAに参加する大学関係者相互に最先端かつ高度な知見に触れ共有する機会を提供し、学際的な見識やネットワークに寄与する場という学輪の可能性を追求するため、学輪IIDAメンバーの研究者としての専門性と教員としてのスキルを活かした、全世代向けの公開講座の実施を目指す。

(令和元年度)

●イベントの実施

将来的な展開を検討するため、試験的に公開講座(ブレオープンキャンパス)を実施した。

講師陣 5名

立教大学/ESD研究所所長 阿部 治 教授

法政大学 石神 隆 名誉教授

埼玉大学基盤教育研究センター

七田 麻美子 准教授

宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センター

塚原 直樹 特任助教

東京農工大学大学院

土屋 俊幸 教授

(令和2年度)

●飯田学輪大学の実施

地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、12講座を実施した。

講師陣 13名

津田塾大学

伊藤由希子 教授

国立天文台

大石雅寿 特任教授

津田塾大学

大島幸 客員研究員

京都外国語大学

影浦亮平 講師

飯田市美術博物館

四方圭一郎 学芸員

法政大学

高柳俊男 教授

宇都宮大学

塚原直樹 特任助教

法政大学

西澤栄一郎 教授

飯田市歴史研究所

羽田真也 研究員

東京農工大学

堀尾正韮 名誉教授

国土館大学

堀口朋亨 准教授

飯田市美術博物館

横村洋介 学芸員

国立長寿医療研究センター

宮國康弘 研究員

○プロジェクトみらい

地域課題に向き合う飯田の高校生や、大学生等からの実践発表により、グローバルな視点でポスト2020の地域（日本）を考えることを目的として、学輪IIDA10周年記念「地方発 若者の未来を考えるシンポジウム」の実施を目指す。

4 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会の設立 (平成30年度)

実行委員会は、飯田の価値の発見・共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認し、学びの体系化・「見える化」を進めることで、飯田や学輪IIDAの磁力を高め、新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりや、高校と大学の有機的な連携の在り方の検討や実践的な展開等により、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」へ繋げることを目指す。

取組の柱

「共通カリキュラムの本格的な展開」

「高校と大学の連携した取組の展開」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・
下伊那農業高校・飯田女子高校・飯田風越高校
大学57名 高校生5名
(外 一部参加高校生18名)

②地域経済フィールドスタディ 2018

大月短期大学・静岡文化芸術大学・立命館大学
大学44名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2018

京都外国語大学・東京農工大学大学院・
松本大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校
大学生・院生11名 高校生8名 教員9名)
ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠山郷
エコ・ジオパークフィールドスタディは、飯田の高校生
も参加し、地域の学びを通じて大学生の学びを体感する
機会となった。

(令和元年度)

「高校と大学の連携した取組の本格的展開」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

首都大学東京・同志社大学・東洋大学・名城大学・
立命館大学・飯田高校・飯田女子高校・飯田風越高
校・下伊那農業高校
大学生30名 高校生15名 教員7名
(外 一部参加高校生19名)

②アグリイノベーションフィールドスタディ

大月短期大学・立命館大学・和歌山大学・
飯田高校・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・

下伊那農業高校 大学生53名 高校生24名
教員 13名 (外 一部参加高校生1名)

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2019

東京農工大学・松本大学・
飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・飯田風越高校
大学生・院生11名 高校生13名 教員7名

(令和2年度)

「オンラインを活用した試行的取組」

①飯田の地域づくりに学ぶオンラインフィールドスタ ディ

飯田の取組を幅広く切り取るため、「地域自治」「着地
型観光」「地域経済」の3コースを設定し実施した。

「新たな学びの形」の試行的取組として、大学生全員が
オンライン参加で実施した。

大月短期大学・東洋大学・名城大学・立命館大学・
和歌山大学
大学生51名 教員10名

②遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2020

オンライン参加の大学生と実際に現地調査も行う高校
生によるハイブリッド型の取組として実施した。

麻布大学・東京農工大学・松本大学・
飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校
大学生・院生12名 高校生11名 教員8名

(令和3年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用した取組」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

大阪商業大学・東京都立大学・東洋大学・
名城大学・立命館大学・和歌山大学・
飯田高校・飯田風越高校・下伊那農業高校・
飯田女子高校 大学生32名 高校生8名 教員7名

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大正大学・東洋大学・法政大学・
立命館大学・飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校・
飯田女子高校
大学生57名 高校生8名 教員5名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2021

麻布大学・帝京科学大学・東京農工大学・
松本大学・飯田高校・下伊那農業高校・
飯田女子高校
大学生・院生13名 高校生19名 教員7名

5 学輪IIDAスペシャルシンポジウム

シリーズ『いいだの未来デザインを考える』

～ after/with コロナ時代における地方の

パラダイムシフトと創生 ～

大学連携会議「学輪IIDA」の専門性やネットワークを最
大限に活かし、コロナ時代のパラダイムシフトをどのよう

に捉え、新たな方向に向かっていくべきか、リニア時代を見据えた飯田の未来について考えるシンポジウムを全3回シリーズで開催した。

●第1回（令和2年8月24日）

「コロナで始まる（変わる）新しい時代を模索する」

〔議論にあたって〕

法政大学 名誉教授 石神 隆 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

〔ディスカッション〕

コーディネーター

信州大学 特任教授 中嶋 聞多 氏

パネリスト

N T Tデータ経営研究所

取締役 唐木 重典 氏

京都大学大学院 教授 諸富 徹 氏

ドイツ日本研究所

所長 Franz Waldenberger 氏

（公財）南信州・飯田産業センター

専務理事 萩本 範文 氏

●第2回（令和2年9月3日）

「飯田だから実現できる未来戦略～つながりと交流の先に～」

コーディネーター

日本経済研究所 常務理事 大西 達也 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

パネリスト

愛知大学 教授 戸田 敏行 氏

金沢工業大学 客員教授 竹内 宏彰 氏

東京大学大学院 教授 牧野 篤 氏

和歌山大学 教授 尾久土正己 氏

●第3回（令和2年9月14日）

「飯田だから実現できる未来戦略 ～持続可能で豊かな地域へのデザイン～」

コーディネーター

法政大学 名誉教授 石神 隆 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

パネリスト

立教大学 教授 阿部 治 氏

法政大学 教授 高柳 俊男 氏

東京都立大学 教授 大杉 覚 氏

事業構想大学院大学 教授 渡邊 信彦 氏

農山漁村文化協会 中田めぐみ 氏

しんきん南信州地域研究所

主席研究員 竹内 文人 氏

6 学輪IIDAウェブサイトの開設

（平成24年6月）

飯田市や学輪IIDAに参加している大学・研究者間の情報共有や、学輪IIDAの取組に関する情報発信を目的に、学輪IIDAウェブサイトを開設した。

ウェブサイトのURL <https://gakurin-iida.jpn.org/>

7 学輪IIDA機関誌「学輪」の発刊

学輪IIDAの取組や大学研究者などの飯田における教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、その実績をより多くの方に知ってもらうことを目的に、平成26年度より機関誌「学輪」を毎年1回発刊する。

8 大学等の受入状況について

南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて、当市に教育・研究・調査等で訪れた大学研究者や学生数

年度	大学数	参加者数
平成20年度	14	176
平成21年度	15	120
平成22年度	16	299
平成23年度	17	422
平成24年度	16	558
平成25年度	27	759
平成26年度	24	956
平成27年度	30	768
平成28年度	35	634
平成29年度	46	648
平成30年度	44	713
令和元年度	52	695
令和2年度	45	526
合 計	381	7274

※参加者数は延べ人数

大学連携会議「学輪IIDA」名簿

(敬称略 R3.12.25現在)

	氏 名	大学機関等名・学部
1	新井野 洋一	愛知大学
2	岩崎 正弥	愛知大学
3	黍嶋 久好	愛知大学
4	戸田 敏行	愛知大学
5	小玉 敏也	麻布大学
6	黒岩 長造	飯田女子短期大学
7	北林 ちなみ	飯田女子短期大学
8	武分 祥子	飯田女子短期大学
9	新海 シズ	飯田女子短期大学
10	青木 千恵美	飯田女子短期大学
11	兼子 純	愛媛大学
12	若生 謙二	大阪芸術大学
13	藤井 至	大阪商業大学
14	青木 伸一	大阪大学
15	土井 健司	大阪大学
16	榎平 龍宏	大月短期大学
17	大串 恵太	追手門学院大学
18	七田 麻美子	オープンサイエンスギルド、埼玉大学
19	菊地 浩平	オープンサイエンスギルド、筑波技術大学
20	塚原 直樹	オープンサイエンスギルド、宇都宮大学
21	竹内 宏彰	金沢工業大学
22	野間 晴雄	関西大学
23	草郷 孝好	関西大学
24	西尾 恵理子	九州共立大学
25	尾上 百合加	九州共立大学
26	廣岡 裕一	京都外国語大学
27	中嶋 大輔	京都外国語大学
28	枝元 益祐	京都外国語大学
29	宮口 貴彰	京都外国語大学
30	村山 弘太郎	京都外国語大学
31	宮木 いっぺい	京都産業大学
32	松崎 行代	京都女子大学
33	諸富 徹	京都大学
34	堀口 朋亨	国士館大学
35	木村 暁	国立遺伝学研究所
36	大石 雅寿	国立天文台
37	中嶋 智子	佐久大学
38	中村 聡志	山陽学園大学
39	渡邊 信彦	事業構想大学院大学
40	下畑 浩二	相愛大学
41	高島 知佐子	静岡文化芸術大学
42	増田 幸宏	芝浦工業大学
43	大杉 覚	東京都立大学
44	飯島 真里子	上智大学
45	銭 学鵬	上智大学大学院
46	田中 清	信州大学
47	脇若 弘之	信州大学
48	柳原 正明	信州大学
49	佐々木 邦博	信州大学
50	中嶋 聞多	信州大学
51	上野山 裕士	摂南大学
52	河藤 佳彦	専修大学
53	西山 巨章	大正大学
54	片岡 美喜	高崎経済大学
55	村山 にな	玉川大学
56	影浦 亮平	千葉商科大学
57	仲川 直毅	中京学院大学
58	林 良嗣	中部大学
59	山下 亜紀郎	筑波大学
60	呉羽 正昭	筑波大学
61	伊藤 由希子	津田塾大学
62	大島 幸	津田塾大学
63	曽根原 登	津田塾大学
64	秦 範子	都留文科大学
65	増田 直広	鶴見大学短期大学部
66	Franz Waldenberger	ドイツ日本研究所
67	Isaac Gagné	ドイツ日本研究所
68	儀間 敏彦	東海大学
69	牧野 篤	東京大学

	氏 名	大学機関等名・学部
70	新藤 浩伸	東京大学
71	李 正連(イ・ジョン)	東京大学
72	瀬田 史彦	東京大学
73	友田 清彦	東京農業大学
74	寺内 光宏	東京農業大学
75	千賀 裕太郎	東京農工大学
76	土屋 俊幸	東京農工大学
77	朝岡 幸彦	東京農工大学
78	榎本 弘行	東京農工大学
79	澤 佳成	東京農工大学
80	竹本 太郎	東京農工大学
81	堀尾 正靱	東京農工大学
82	井口 貢	同志社大学
83	多田 実	同志社大学
84	有井 健	同志社大学
85	小林 正夫	東洋大学
86	佐々木 茂	東洋大学
87	澤田 俊明	徳島大学
88	蜂谷 充志	常葉大学
89	大貝 彰	豊橋技術科学大学
90	井上 隆信	豊橋技術科学大学
91	松島 史朗	豊橋技術科学大学
92	浅野 純一郎	豊橋技術科学大学
93	中川 亮平	長野県立大学
94	加藤 博和	名古屋大学
95	中村 英樹	名古屋大学
96	エマニュエル・レレイト	名古屋大学
97	小畑 力人	日本観光ホスピタリティ教育学会
98	大濱 裕	日本福祉大学
99	江原 隆宜	日本福祉大学
100	宮國 康弘	日本福祉大学
101	大塚 理加	国立研究開発法人防災科学技術研究所
102	高柳 俊男	法政大学
103	曾 士才	法政大学
104	大西 亮	法政大学
105	小門 裕幸	法政大学
106	酒井 理	法政大学
107	石神 隆	法政大学
108	西澤 栄一郎	法政大学
109	関司 直也	法政大学
110	辛島 一樹	前橋工科大学
111	白戸 洋	松本大学
112	田開 寛太郎	松本大学
113	江成 穰	松山大学
114	福本 拓	宮崎産業経営大学
115	劉 一辰	明海大学
116	竹本 田持	明治大学
117	横井 勝彦	明治大学
118	小川 智由	明治大学
119	水野 勝之	明治大学
120	大友 純	明治大学
121	佐々木 宏幸	明治大学
122	福島 茂	名城大学
123	井内 尚樹	名城大学
124	蘭 信三	大和大学
125	阿部 治	立教大学
126	野田 健太郎	立教大学
127	井出 万秀	立教大学
128	廣江 彰	立教大学
129	JONES Thomas Edward	立命館アジア太平洋大学
130	須藤 智徳	立命館アジア太平洋大学
131	森 裕之	立命館大学
132	平岡 和久	立命館大学
133	佐藤 龍子	龍谷大学
134	藤田 武弘	和歌山大学
135	尾久土 正己	和歌山大学
136	大浦 由美	和歌山大学
137	岸上 光克	和歌山大学
138	山本 由美	和光大学
139	早田 宰	早稲田大学

※上記のほかオブザーバー参加の大学研究者もいらっしゃいます

学輪IIDA 機関誌「学輪」 一投稿規程一

制定 平成26年4月1日
改定 平成27年4月1日

1. 掲載論文の原則

- (1) 掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。
- (2) 投稿原稿のカテゴリーは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴリー設定をできる。また、投稿原稿については、上記のカテゴリーでは適応できないと判断できるものについては、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリーの設定をできる。
- (3) 掲載原稿は、日本語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- (4) 依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集局より依頼する。
- (5) 投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」以外のカテゴリーの投稿原稿については、編集委員会が採否を決定する。
- (6) 執筆要領については別途定める。
- (7) 原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。
- (8) 依頼原稿については、掲載ページ1頁につき1,500円の原稿料を支払う。
- (9) 査読については、1原稿5,000円の査読料を支払う。
- (10) 事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は学輪IIDAに帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載し、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

2. 投稿の条件

- (1) 学輪IIDAのコンセプトに合致した内容であること
- (2) 原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。
- (3) 投稿原稿は、学輪IIDAの構成員又はその指導する大学院生若しくは大学院修了者によるものとする。共著の場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。
- (4) 学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が投稿する場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容で

あることを確認しなければならない。

3. 投稿原稿の内容

飯田市における取り組みに関する研究の成果及び特定の地域・資料等の調査結果に関する報告、又は上記以外で、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」という学輪IIDAコンセプトの推進に寄与するもの。

4. 投稿原稿の採否

投稿原稿「論文」は、査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

- (1) 査読は、2名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低1名は学輪IIDAの構成員とし、学輪IIDAの構成員以外のものに査読を依頼する場合は、編集委員会は学輪IIDAの趣旨及び査読要領を了解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。
- (2) 査読者は、次の点に留意して査読をする。
 - 1) 原稿条件に合致しているかどうか
 - 2) 誤字、脱字がないかどうか
 - 3) 他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載など著作権をしていないかどうか
 - 4) 執筆要領に反していないかどうか
 - 5) 著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものでないかどうか
 - 6) 査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか
- (3) 査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正箇所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。
- (4) 2名の査読者のうち1名が「掲載」と判断した場合は、掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他の判断の理由を考慮してその範囲において一部改変することを可能とする。
- (5) 上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。但し、学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学

院修了者が異議申し立てをする場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。

(6) 前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張を考慮して、掲載についての判断を行う。なお、必要な場合は、対質の場を設定することができる。

(7) 査読者は匿名とするが、前項の対質を行う場合は、この限りではない。

5. 投稿手続き

投稿者は、正本1部、副本2部、および電子データを本学会編集委員会宛に提出する。

6. 経費負担

投稿料は徴収しない。ただし、刷り上がり頁数が執筆要領に記した上限頁数を超えた場合には、1頁あたり3,000円の超過料金を請求することがある。また、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

7. 校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正を行う場合がある。

8. 抜刷

50部は無償配布する。それ以上必要な場合は、実費請求する。

学輪IIDA 機関誌「学輪」 一執筆要領一

制定 平成26年4月1日

1. 原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則としてワープロまたはパソコンを用いて作成すること。

また、原稿はA4用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

- (1) 表紙：表題・著者名・所属（原則1つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない）・キーワード（5つ以内）を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。
- (2) 本文：日本語の場合、横書きで1頁あたり40行×40字で印刷する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。
- (3) 注：番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。
- (4) 参考文献：書籍の場合は「著者名・署名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。
- (5) 図表：本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない場合は省略することができる。
- (6) 要旨：日本語の場合は400字以内、外国語の場合はこれに準じた分量とする。

2. 原稿の分量

刷り上がり頁数で、10頁を上限頁とする。1頁の刷り上がりは26字×47行×2段（2,444字）である。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。ただし、上限頁を超えた場合には、投稿規程に従った超過料金を請求することがある。

[執筆者一覧] (掲載順)

田開 寛太郎 (松本大学総合経営学部)
宮國 康弘 (日本福祉大学)
吉田 瑛里香 (津田塾大学総合政策学部3年)
伊藤 由美子 (津田塾大学総合政策学部2年)

大塚 理加 (国立研究開発法人 防災科学技術研究所)
大島 幸 (津田塾大学総合政策研究所)
佐藤 陽菜子 (津田塾大学総合政策学部3年)

[通信欄]

学輪IIDA機関誌「学輪」は、学輪IIDAのメンバーである大学研究者の皆様の発意により、2014年度に創刊いたしました。以後、学輪IIDAの取組や大学研究者等による飯田に関する教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、その内容を多くの方へお知らせすることを目的として、第8号特別号まで発刊を重ねてまいりました。

本号におきましても、ご投稿いただきました皆様をはじめ、多くの方のご協力のおかげで発刊するにいたしました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

今後も、飯田で展開される取組みから得られる知見が機関誌「学輪」に蓄積されていくとともに地域内外へ広く発信できますよう、多くの皆様からの投稿を心よりお待ちしております。

[編集委員]

平岡 和久 (立命館大学政策科学部)
福島 茂 (名城大学都市情報学部)
小林 正夫 (東洋大学社会学部)
廣岡 裕一 (京都外国語大学国際貢献学部)
上野山裕士 (摂南大学教育イノベーションセンター)
藤田 武弘 (和歌山大学観光学部)
藤井 至 (大阪商業大学経済学部)

[編集局]

和歌山大学観光学部
編集局長 藤田 武弘
編集局 藤井 至

[事務局]

飯田市 総合政策部 企画課
大学・三遠南信連携係

大学連携会議「学輪IIDA」
機関誌「学輪」
第9号 2021
(年1回発行) 2022年1月発行

●
発行
飯 田 市
395-8501 飯田市大久保町2534番地
0265-22-4511
<https://www.city.iida.lg.jp>

●
印刷所
龍共印刷株式会社